

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0m 1 2 3 4 5

字  
21

日瑞月口述

靈界  
物語

山河子木

戌之卷

省務内  
1411.5  
正本

1411.6  
子木  
江

始



函
安 2 /
號
永久保存

禁止
安
年 月 日
第 号

4501  
249

出口瑞月口述

山河草木

〔靈界物語第七十一卷〕

天聲社發行



1094696



1094696



師聖月瑞の髪束



1944

序 文

大正乙丑八月十四日、松村、加藤、北村の筆の勇者と、田中艶子を伴ひ、秋山彦の舊蹟地なる和知川の下流由良の港に安着し、海水浴に浸り乍ら、寸暇を利用して、日下開山の續編を口述する事に致しました。北丹分所長嵯峨根民藏氏、新舞鶴支部長村山政光氏の厚情に依り、消夏の歡樂に浸り得たることを感謝に堪へません。毎日日本海の波に親しみ、大本に最も由緒の深き男嶋女嶋の神域を拜し乍ら、心靜かに述べ了りました。

大正十四年八月二十一日

口 述 者 識

序 文

二

瑞 月

いそのかみ古事記は高光る

天津日繼のしるべなりけり

ちはやふる神の本宮たづぬるれば

綾の高天の原にありけり

大本の神の教の言の葉は

すべての人の薬ともなれ

# 山河草木

(戌の巻) 目 次

次

序 文

總 説

序 文……………頁  
總 説……………一

## 第一篇 復活轉活

第一章 復活祭……………三

第二章 逆襲……………二六

第三章 草居谷底……………三九

第四章 誤靈城……………五四

第五章 横戀慕……………七四

目 次

一

第二篇 鬼薊の花

第六章 金酒結婚……………九一

第七章 虎角……………一〇六

第八章 擬俠心……………一二一

第九章 狂怪戰……………一三七

第一〇章 拘淫……………一五六

第三篇 開花落花

第一章 狂擬怪……………一七九

第二章 開狂式……………一九八

第三章 漆別……………二一三

第四章 花曇……………二三〇

第一章 騷淫ホテル……………二四七

第四篇 清風一過

第一章 誤辛折……………二六三

第二章 茶粕……………二八〇

第三章 誠と偽……………三〇〇

第四章 笑拙種……………三二七

第五章 猫鞍干……………三三一

第六章 不意の官命……………三三八

第七章 歸國と鬼哭……………三五一

山河草木(子の巻)目次終



# 山河草木 〔成の巻〕 [71]

口述者 出 口 瑞 月

筆録者 松 村 真 澄

加 北 藤 明 子

## 總 說

本卷は山河草木日下開山の後編でありまして、ウラナイ教の神柱、お虎、守宮別、お花のローマンスや、ブラバーサの聖地に於ける活動の状況を述べたものであります。ヘグレのヘグレのヘグレ武者の妄動振り、お花の意気地、守宮別の色慾道に陥り蠢動する光景などは如實に描き出されてあります。

總 說

大正十四年八月二十一日

口

述

者

誠

二

大正十四年八月二十一日  
瑞 月

わたつみの深き恵を覺りけり

棚無し舟に安く渡りて

かすおほき教はあれど惟神

我が大本の教奇すしき

山 氏 草 木

第 一 篇 復 活 轉 活

第一章 復活祭 (一八〇七)

十二日は聖師ウズンバラ、チャンダーの降誕日に相當するので、ブラバースは草庵を立つて其吉辰を祝すべく、橄欖山の聖地に參詣して、熱烈なる祈禱を捧げ了り、今日は常よりも緊張した気分で、且つ敬虔な態度で山を下り、アメリカンコロニーにも立寄り聖師に會つて神徳談を交換し、日没前袂を別ち、歸途カトリックの僧院ホテルに立寄つた。恰も當日は聖キリストの復活祭で全基督教會は之を大聖日として一齊になる祈禱が捧げらるるのである。舊教も新教も何れの教派を問はず、最も榮々ある福音として此の聖日を迎へるのである。そして舊教の方面から見ると當年は聖年に當つて居るが、その聖年中の復活祭として乙丑の四月十二日を最も祝福する事に成つてゐる。大

体カトリック教會では三月第三回目の水曜日から聖年は四旬節に入つてゐるのである。祈りと、斷食と、苦行との節が初まるのである。即ち祈り、苦行、犠牲がこの四旬節に行はれる。そして四月に入るに五日から十二日の復活祭までは是を大週又は聖週として五日を聖き枝の主日、又は棕櫚の主日と云ふのである。

「弟子たち往きてイエスの命じ給ひし如くに爲し、牝驢馬とその子を引き來たり己が衣服を其上に敷き、イエスをこれにのせたるに、群集夥しく己が衣服を道に敷き、ある人々は樹の枝を切りて道に敷きたり。先に立ち從へる群集呼ばりて、ダヴィドの裔にホザンナ、主の名によりて來たるものは祝せられ給へ。いと高きところまでホザンナを言ひ居れり」

即ちイエスがエルサレムに入つた時、人々は道に着物や木の枝を敷いて歓迎した其

日なのであるが、四五日を経てそれ等の人達は其のイエスを十字架にかけたのである。九日は聖の土曜でイエスが死没の前夜、弟子を集めて最後の晚餐を催し聖體の秘蹟を定めた日である。この日司教座の在る聖堂では聖香油を造ることに成つてゐる。

十日は聖の金曜であつて、イエスが十字架に上り死刑に處せられた日である。米國あたりでは午後一時から三時まで、即ち其刑の執行時間を、皆店を閉ぢ商賣を休む習慣の所もあると云ふことである。

十一日は聖の土曜で復活の光明が灰かに刺した日である。そうして、十二日の復活大祝日となるのである。

「おそろ、こと勿れ。汝等は十字架につけられ給ひしナザレのイエスをたづぬれどもかれは復活し給ひて、こゝにはまします」

そして此の聖週が終つても、十三日を復活第二の主日と爲し

「汝指をこゝに入れて、我手を見よ。手を延べて我が脇に入れよ。不信者とならずして信者となれよ。トマス答へて、「主よ。わが神よ」と言ひしかば、イエスこれに言ひけるは、トマス汝はわれを見しによりて信じたるか。見ずして信ぜし人々こそ福なれ」

そして十四日をその第三の主日とするのである。

「我は又この檻に屬せざる他の羊をもてり。かれ等をも引き來らざるべからず。さて彼等我聲をき、かくて一つの檻、一つの牧者とならん」  
これらの教を各教會に於て一齊に説かれて居るのである。

ブラバースが立寄つた僧院ホテルの別室には數多のカトリック教徒が集まつて、此

の聖日を祝すべく、復活祭第一の主日の祭典や祈禱を行つてゐた。

ブラバースはルートバハーの聖師の誕生日に當つて、此の僧院に嚴肅なる儀式が行はれてゐる事を何となく嬉しく、且つ神縁の絡まれたる不思議さに感歎しながら、式の終るを待ち、末座に敬虔な態度で祈禱を捧げ、感慨無量の面持であつた。

ホスピース、ノートルダム、ド、フランスのこの加特力僧院ホテルを經營してゐる司教テルブソンは先途に立つて神の御前に三拜し、一同の信者と異口同音に左の讚美歌を唄ふた。

一 御祖はあれまし 道を説けり

なやみに住む人 求めて來たれ

智慧のみはしら 世に降り

よはき人々よ 來たりまなべ。

二 伊都の大神は 世に降り

よろづの人々 來たりたのめ

身魂をきよむる 神の清水

汚されし人は 來たりす、け。

三 美都の大神 世に出でます

なやめる人々 來たりたのめ

生命の御親は 世に降り

つみにしみし人 求めて生きよ。

四 美都の御柱は 世に生れぬ

うへした諸共 來たり齋け

天地のはしら 御世に降り

すべてのものみな 勇みうたへ。

一同美聲を揃へて四邊の空気を清めたる讚美歌の奉唱も無事終了し、司教のテルブソンはさち莊重な聲にて一場の演説を試みた。

テルブソン 「御一同様今日は吾々信者に採つて最も慶すべき吉辰でムいます。メシヤの復活あそばされて、天國の福音を世界の同胞に垂れさせ給ひました主の日でムいます。就ては主の御約束遊ばした聖地エルサレムへ御再臨の時期も追々近づいた様に拜せられ、我々は實に神様より選ばれたるビュリタンとして、此上の光榮は任るまいと思ひます。皆様、主は「我が來るは平和を出さん爲では無い。刃を出さん爲に來

れり」を仰せられてゐるでは在りませんか。我々は主再臨の好時期に生れたものですから、餘程の覺悟を致さなくては成りませぬ。現代人の多數は宗教の力に依つて、或は絶對的信仰の力に依つて、眞善美の行爲を現はし、家庭の圓滿を企畫し、自己の人格を向上し、社會國家を益せんものと焦慮してゐる様でいます。然し私には思ふ、ソナナ怪智くさい考へを以て信仰が得られませうか。刃を出す覺悟が無くては再臨のキリストに救はる事は出来ませぬ。信仰の爲ならば、地位も、財産も、親兄弟も、知己も、朋友も一切捨てる覺悟が無くては駄目です。信仰を味はつて家庭を圓滿にしやうと云ふか、人格を向上させやうと云ふやうな功利心や自己愛の精神では堂して宇宙大に開放された、眞の生ける信仰を得る事が出来ませうか。自分は世の終りまで惡魔だ、地獄行きだ、一生涯世間の人間に歡ばれない。こうした悲痛な

絶望的な決心が無くては、此の洪大無邊にして、有難い尊い大宇宙の眞理、眞の神様に觸れる事が出来ませうか。某聖者が地獄一定と曰はれたのは此處にある。某聖者は世を終るまで惡人たる事を覺悟されてゐた。主イエス、キリストも神様の御命令とあれば人殺をも敢て辭さないといふ覺悟を持つて居られたのであります。一切の囚はれより、一切の慾望より、一切の執着より、眞に離れ去つた時、それは眞に胸中無一物、空の空であり無の無である。その時の心境こそは鏡の如く晴れ渡り、澄み切り、總ての事象は如實にその心境に移り來る。その時こそは眞に絶對の自由と平安と、幸福は立どころに與へられ、さうして過去の一切の經驗は一つの偉大なる力となつて、現在の一點に躍動するものであります。即ちこの瞬間の一點を踏みしめ、疑乎と足許を見極めて精進するやうになれば、そこに所愛の創造があり、進

化があるのです。私は平素この精神を以て信仰生活を終始して居るのです。私はこの僧院の司教として斯る信仰を持ち、聖キリストの再臨を待つて居るのですが、世間の一般からは外道惡魔の様に批評されてゐます。併し乍ら斯る暗黒の世の中にも私只一人三五教の宣傳使ブラバサ様の知己あることを光榮と存じて居ります。兎に角キリスト再臨の間近く迫つた今日。總ての因習を捨て神様の愛に向つて猛進せなくては成りませぬ。善だか惡だか天國地獄なきに囚はれて居ない私は皆さんに向つて何も甲上ける原料も持説もありません。故に今日は主の復活聖日を祝福し皆さんと共に神を讚美し奉ることに止めておきます。アーメン」

と合唱し降壇した。拍手の聲は急霰の如く僧院ホテルの内外に響き渡つた。

次にスバツフオード聖師は立つて一場の演説を試みた。

スバツフオード「皆様今日は實に有難い主イエス、キリストの復活あそばされた聖年聖日で、ムいまして、吾々は斯の立派な僧院におきまして、兄弟姉妹と共に主の日を讚美し祝福することの光榮を感謝せずには居られないので、ムいます。我々兄弟姉妹はこの目出度き聖日をして意義あるものたらしめねば成りませぬ。そして傳統的ブルジョアの宗教や、傳説や口碑に因つて飾られたる既成宗教の殻を脱いで、時代を指導するに足る宗教の運動に生きなくては成りませぬ。我々の團體は創設以來數十年の日子を経過いたしました。そして聖キリストの再臨を待望して参りました。やがて待ち焦れたるメシヤの御再臨も近い事と考へさして頂いて居ります。今度顯はれたまふ主エス、キリストは時代相應の理に依つて屹度英雄的色彩を濃厚に持つて御降りになる事と信じます。



熟々現代の世相を視れば一方には文學を耻ぢて武勇を好むもの、一方には文學に耽溺して武備徹回を主唱するもの、仁義の士を賤しみ且つ愚者抜ひを爲し、權謀術數に長じたるものを紳士と崇め、治獄の吏を貴み、惡法を施行し、正言眞語を唱ふるものを以て誹謗者と看做して獄に投じ、奸邪を重用して政事の樞機に列せしめ、過ちを防遏せんとするものは之を妖言者と泛し、流言浮説者として壓迫を加へ、先聖の法服世に用ひられず、忠良功言皆胸中に鬱し、譽諛の聲は日夜耳に滿ち、虛榮と美食心を薰じ、實行なく、口説のみ盛んにして、社會の滅亡眼前に迫るの心地が致します。斯かる時代に際して一大英雄即ち救世主の降臨が無かつたならば最早世は暗黒より道はないでせう。神的英雄なるものは國家又は社會の實體とも曰ふべきものであつて、國家も社會も要するに英雄理想の具現の形式であります。凡て英雄の

無き國家社會は精靈の脱出した人間の屍体も同様であります。精神の脱出した人間の肉体が恣意なる五慾の亂起によつて自らの破滅に終るが如く之を大統する神聖聖者の缺如は、常に國運の衰弱、否死滅も同様であらうと思ひます。今日の世の中は文化の低下せしにもあらず、生産の減少にもあらず、僧侶宣傳使の尠きにもあらず兵備の整はざるにもあらず、然るに昨日の隆盛も今日の沈衰、徑庭かくの如く甚だしきものは何の理由ぞ。要するに國家社會本來の意義を体得した大統的偉材の缺乏せるが爲でういませう。故に私は民衆的力をば信ずることは出来ませぬ。獨り神聖的聖救世主の出現を待つのみでういます。

主エス、キリストが山上に訓を垂れさせ玉ふや、群集は其の教に驚き、孔子の春秋を作つて發表するや、亂臣賊子をして悚懼せしめたではういませぬか。そは主キリス

トや孔子は所謂學者等の如くならずして、權威あるもの、如くであつたからでありませう。今や世界の民は自ら驚かんとことを求めつゝあります。今日の人民は既に自分等が不平の代辯者の饒舌に倦み果て、居ります。今日の人民が鶴首して待つて居るものは、金切聲を搾つて彼等自身の窮状を説明するものでは無くて、神の如き威嚴を以て其の進路を指すもの、出現であります。神に於てはその言ふ所は即ち行ふ所となるのであります。徒に民と共に叫び、民と共に躍る如きは是れ雪上更に霜を加ふるい類であつて、我々眞に天下の重きを以て任ずる信者諸士の深く恥る所なのであります。何卒我が敬愛なる神の御子たちよ、民衆の煽動に乗ずること無く隱忍自重して以て神雄偉人としての聖キリストの再臨を待たうぢやムいませんか。アーメン』と結んで演壇を降る。急激の如き拍手の聲に満堂揺がん許りの光景であつた。

ブラバースは壇上に悠々と立上り、暗祈黙禱の後、聴衆一般に向つて、敬意を表しコップの水を一杯グイと呑干し乍ら、咳一咳して曰く、

「皆様、今日は實に目出度き主の復活日でムいまして、地球上の人民は、老若男女の嫌ひなく、此聖日を欣仰せない者はムいますまい。殊に我々御互は神様の寵兒として、親しく神様にお仕へさして頂いて居りまする點からしても、特に讃仰せねばならないと存じます。思想界の惡潮流は世界に氾濫し、今や地上の神の國は破滅せんとするの勢でムいます。一時も早く此暗黒の帳を開いて、明晃々たる日出の御代を來すべく、吾々は努力せなくてはなりません」

斯く論じ來る折、聴衆の中よりやをら身を起し、満面朱を澱ぎ乍ら、ツカ／＼と壇上の上つて來た婆アは、日出島からやつて來たお寅であつた。お寅はブラバースに向

ひ、

お寅「コレ、お前はブラバースアぢやないか。今聞いてをれば、一時も早く日出の御代になる様、吾々は努力せんならん云つたぢやないか。日出の御代にするのは、日出國の天職ぢやぞね。そして日出の島から現はれた此日出の神が本當の世界の救世主だ日出の神の因縁が聞きたければ、此御本尊に聞いたが一番近道だ。ひつこんでるなさい。ヘン、偉相に、宣傳使面をさけて、何のこつちやいなア。コレ皆さん、こんなバチ者に耳をかす必要はありません。誠の救世主日出の神は此お寅でムいますぞや。第一此ブラバースアなんて、面からしてなつてゐないぢやありませんか。梟鳥のような目玉をして、土左衛門のように青ぶくれた面して、此ザマつて、ムいますま

」

聽衆の中より、

「お寅婆アさん、退却々々、引づりおろせ」

と叫ぶ者がある。又一方よりは

「ブラバースア聖師、確り頼みます」

と叫ぶ者もあつた。お寅はクワツと怒り、聽衆を睨めつけ乍ら、

「ヘン盲聾と云つても餘りぢやないか。これでは神様も御苦労ぢやわい。警鐘亂打の聲も雷霆叱咤の響きも、耳に這入らぬといふ御連中の多い世の中だから、三千世界界の立替立直しを双肩に擔うた此日の出の神も、本當に迷惑を致しますわい。此ブラバースアといふ立派な宣傳使さんは、お前さん方遠國の事で何も知らんだらうが、今此お寅の救世主が素性をあかし、皆さんのお目をさましてあげませう。ウズンバ

ラチャンダーなきと申す偽變性女子の隨使に甘んじ、キリスト再臨の先驅だなきと自惚して、ぬつけりこと此聖地に参り、あろう事か、あるまい事か、神聖にして冒す可らざる、オリブ山の聖場に於て、夫れは／＼いふに云はれぬ、とくに説かれぬ、話にも杭にもかゝらぬ、面白い怪体な亂痴氣騒ぎを遊ばすといふ大神士でゐいますから、ホ、ホ、ホ、。餘り可笑しうて臍が茶を沸しますぞや。こゝ迄いふたら、大體のお歴々方は略肯かれませう、アメリカンココニーの牛耳をとつてゐるといふマリヤさんと、それは／＼、ヘン……もう後は云ひますまい。同席するも汚らはしい。ブラバーサさん、トットと、良心があるなら、退却なされませ。ようまあぬつけりことこんな所へ、帯柄な面をして上られたものだな。早くシオン山の隠處へでもひつ込んでゐなさい。日出の國人の可い面よごしだ」

ブラバーサ「皆さん、私は折用の此聖日に當りまして、皆様と共に主の日を祝し奉り、尙將來の御相談を致したいと存じましたが、斯の如く邪魔が這入りましては、お話する譯にもゆかず、又皆様も喧嘩をお聞にお出でなされたのぢやゝいませぬから、私は一寸控えますから、さうかお寅さんの演説を聞いて上げて下さいませ。匹夫の言にも得る所ありといふ事もありますし、まして三千世界を統一し、且改良するといふ大責任を自覺してゐる御方ださうでゝいますから……」

お寅「そら、何アんー仰有るのだ、匹夫の言とは誰の事だ。大方蛙は口から自分の事を云つてるのだらうな。匹夫といへば男のこと。此お寅さんは、淑女否神女だ。神女と匹夫と混同するやうな事で、さうして宣傳使が勤まりますか」

ブラバーサは耳にもかけず、サッサと降壇し、聴衆の中に交つて、ハンケチで汗を

ふいてゐる。お寅は勝誇つた面持にて、稍反り身になり乍ら、コップの水を二三杯つゞけさまにグウ／＼とひっかけ、餘りあわて、水が氣管支の中へ浸入し、コホン／＼と咳拂止まず、目から一杯涙をこぼし、卓にもたれて、しやがんで了つた。そこへ守宮別はお寅の演説を補はんご、ツブ六に酔ひ乍ら、ヒヨロリ／＼と登壇し、

守宮「皆さん、お寅はんは、中途に負傷を致しましたので、拙者が代つて代理を勤めます。どうぞ不悪、思召し下さいませ。私は自轉倒島から案内役として、お寅さんに頼まれ参つて来た者で、ムいですが、別にお寅さんの説を信じたのでもなければ、神格に感動したのでもありません。付いてはブラバサ君に對しても同様の考へを持つてをります。こに角世の中は偽救世主、偽キリスト、偽豫言者の横行闊歩する最中ですから、これがホン物か偽者か、一寸判断に苦まざるを得ませぬ。キリストといふ事

は日の出の國の言葉でいへば、……油をそぐ者……こかいひますが、油を注ぐ事に付いて最も堪能なのは此お寅さんですよ。喧嘩の火が燃え盛つてる所へ、薪を放り込み油を注ぐような事得意で爲います。それで火の勢が益々強くなるので、それで火の出神と自稱してゐるのであります。ヤソといふ事はイエスともいひ、イエスは癒やすといふ事にもなり、要するに薬といふ事です。くすりはヤクとなるヤクは薬師如来です。ヤッコスです。それで薬の最秀れた物は酒です。これ位功験のある神は世界にムいますまい。一口のんでもすぐに頬にホンノリと赤味が出て来る。二三口三口と吞めばのむ程心が浮いて、世の中が面白くなつて参ります。つまり天國が忽ち出現するのです。それに何ぞや、禁酒禁煙だとかキリストの信者はいつてゐますが、これ位矛盾した事は世の中にムいますまい」

なき、へ、レケに酔ふて酒官傳をやつてゐる。其間にお寅は喉の調子が直つたごみに頭を擡げ、守宮別の側にゐるのを見て、百萬の味方を得た如き気分になり、

お寅「皆さん此方は守宮別といひまして、日の出の島切つての聖人でムいます。併し乍ら少し許り今日は聖日を祝する爲に、お神酒をあがつてゐられますから、チット許り脱線の氣味があるかも知れませぬが、脱線する様な人間でないご正當な事は分りませぬ。御覽なさい、汽車でさへ餘り勢よく走ると、勢が餘つて脱線するでせう。そうだから其積で聞いて貰はんご、取違されるご困りますから、一寸御注意を與へておきます」

聴衆は四方八方よりワイ／＼と騒ぎ立ち、「引づりおごせ……放り出せ」と嗷鳴り出した。演説を聞に來てゐた、回々教の信者トシク、テク、ツローの三人は矢庭に壇上に駈上り、トシクはお寅をかたけ、テク、ツローは守宮別をかたけで、ヨイシ／＼と嘯し立て乍ら、僧院ホテルの裏口より何處ごもなく駈出して了ふた。之よりブラバースは再壇上に立ち、救世主の再臨に關する演説や、世界共通語の必要なる所以を説き、次でマリヤの簡單なる演説あり、神前に拜禮を了り、茶菓の饗應あつて目出度く此聖日祭を閉づる事になつた。

(大正一四、六、三〇、舊八、一九、於丹後由良秋田別荘、松村眞澄録)

瑞 月

たに／＼の小川の水も末ついに  
流れ合して海となりゆく

## 第二章 逆

襲 (一八〇八)

ブラバースは僧院ホテルの祝祭は無事に済んだが、同じ日出島から出て来たお寅や守宮別が、亂暴極まるアラブに擡渡はれ行衛不明となつたので「人情上、捨ておく譯にも行くまい。あく迄彼を探し出し助けねばなるまい」とマリヤと相談の上、十二日の月光を浴び乍ら、夜の十二時頃からエルサレムの町をうろつき初めた。

市街の十字路、キラ／＼と瓦斯燈のきらめく側に般若茶の婆が立つて、

「三千世界の救世主、日出の神の生宮の所在は何處、亡びんとするエルサレムの民よ、早く目を覺ませ。天來の救世主の在處を求めよ」

と叫んでゐる。神都の雜音は愈ふくれ廣まつた。荒々しい獸のやうに行人の目先を掠めて、夜分は云ひ乍ら左右に黄色い砂塵に包まれた電車やブーと不愉快な警笛をならし、最後尻を放り乍ら自動車が入り亂れて走り交ふ。さうしたものかエルサレムの市中は俄に電燈が消えて、闇の凝が天から落ちて来た。ブラバースもマリヤも街路に佇立し、一心不亂に祈り初めた。

電車も自動車も馬車も一時に運轉を中止し、水を打つたる如く俄に靜寂となつた。パツと一時に電燈がついた。家々の店の大飾り窓に火がつくと、ここに佇んでゐた二人は俄かに見分けのつかなくなつた黒暗の凝にとけて、その面相が判然として来た。よく見れば一人の婆アさんはあやめのお花であつた。お花は俯向いてシク／＼と泣いてゐる。ブラバースはツカ／＼と側により、

ブラバース「ヤア、貴女はお花さんじゃありませんか。お寅さんは、どこに行かれたか

御存じではありませんか」

お花 「ハイ、所在が分るやうな事なら、こんな處に誰が阿呆らしい、立つて居りますか」  
ブラバース 「大變な御立腹ですな。實は私もマリヤさんと相談して、同じ日出島の同胞でもあり、打ちやつておく譯にも行かぬからウロ／＼と尋ねて居るのですよ」

お花 「それはどうも御親切ありがとうございます」

と腮をつき出す、その面憎さ。電燈の火に二つの目が異様にきらついて居る。

マリヤ 「誠に思はぬ御災難でございました、あのトンク、テク、ツーロと云ふ奴、實に仕方のない、アラブですよ。妾がいつぞや橄欖山に行きました際、危なく手込めにしやうとするのを、このブラバースさんに救げられたのですよ。實に險呑な人物ですから油断はなりません」

お花 「ハイ、御親切に有難う。その又悪い奴をお使ひ遊ばす、貴方等の御腕前、感じ入りました。ようマア企んだものですわい、ウフ、、、」

と又もや腮を二三寸つき出して見せる、

ブラバース 「お花さん、貴女は、我々に何か疑をかけてゐらつしやるやうですが、我々は迷惑に存じます。この通り電車や自動車の往來が多いので險呑でもあり、通行係がやつて来てゴタ／＼云はれるのもつまりませんし、何處かの座敷でも借つてトックリと御相談でもしませうか」

お花はブラバースがアラブを豫め頼んでおいて、お寅をさらへさしたに違ひない何れこの二人をこつちめて白状させた方が近道だと思つたか、俄に顔色を和らけ

お花 「ハイ、さう願へば結構でいますな。何と云つても、きつてもきれぬ同胞ですか



ら、海洋萬里を渡つて異境の空に神様のために働いてゐるものですから、かやうな時は常は常として、親切を盡すのが神様に對して孝行と云ふもの、つきましては、私が常日頃心安くしてゐる茶屋がありますから、それへ参りませう。さア私について來て下さいませ」

と早くも南の方を指して二三丁許り細い路次を潜つてトルコ亭と云ふ茶屋の裏座敷へ案内した。ブラバースとマリヤは黙つてお花の後について行く、こゝはお寅が宣傳の巢窟と見えて大きな看板がか、つてゐる。

「三千世界の救世主、大彌勒の生宮、日出神の御靈城」

と筆太に掲げてある。さうして神殿には日の丸の掛軸が只一つブラ下である。

ブラバース「ヤアこれはく大彌勒様の御靈城でムいますか。私も永らくエルサレムに

居りますが、こんな靈城が出来て居ると云ふ事は今日初めて覺りました」

お花「ホ、、、貴方も比較的ウツカリしてゐられますね。ポーランド人、トルコ人、ユダヤ人等が日々澤山に大彌勒さんの教を聞きに参りますよ。貴方は一体信者が幾人許り出来ましたか、到底大彌勒さんには叶ひますまいがな」

ブラバース「ナル程私如きは到底お側へも寄れません。然し乍らあんまり、さうエルサレムの町では評判になつてゐないやうですが」

お花「そらさうでせうとも、……燈臺下は眞暗がり。遠國から分つて來る……と神様が仰つたでせう。遠く海を隔て、エジプト、フランス、トルコ、伊太利等から日々珠數つなぎに晝は参拜者がムいますよ。何と云つても大彌勒さんの御名は世界に響いて居りますからな」

ブラバース「へー、そりや感心だ。水清うして魚すますと云つて、ヤツバリ濁つて居らねばいかぬのかいな。私も一つ方針をかわやうかな。今迄の私の方針はあまり清らかで効果が却つてうすいのだらう、なあマリヤさん」

マリヤ「さうでムいますな。あんまり清淨潔白な誠許りをお説きになるものだから、魚鱗が寄つて來ないのでせう、貴方も之から少し許り方針をお變へなさるが宜しいでせう。アメリカンコロニーでも、あまり教が清いものだから、あまり發展して居りませんわ。四十年もか、つてまだ百人位ほか出來ないのですからな」

お花「マア、おかけなさいませ立話は足がしびれます」  
と籐の椅子をあてがい、丸い机を真中において三人は鼎座となつた。お花は二人に茶を汲み乍ら、

お花「今ブラバースさんの仰有る事を聞けば、濁つて居るから人が寄ると仰有つたが、日出神のお寅さんは、清淨潔白です。水晶身魂ですから、何處から何處迄澄んで居りますよ、世の中が濁つてゐるから清めに來られたのですよ。貴方も、ソレ橄欖山上でマリヤさんと云々されるやうな事で、さうして神業が發展しますか。よう考へて御覽なさいよ。國許には奥さんや娘さんもあるじゃありませんか。その奥さんや娘さんは朝晩水をかぶつて無事に神業をつとめて過失のないやうに祈つてゐるのに、處もあらうに橄欖山で天消地滅の亂痴氣騒ぎを遊ばすのだから、イヤモウ、その凄腕前には、いかな守宮別さんだつて舌をまいてゐられますわい。オホ、イヤ之は失禮、さうかお氣にさへて下さいますなや」

マリヤ「お花さん、人の事を云はうと思へば、我頭の蜂から拂ふてか、らねばなりません

まい。お寅さんだつて國には大將軍と云ふ立派なく夫があり、お子達も澤山ある  
じやありませんか。それに何ぞや守宮別さんとエルサレム二界迄手に手をこつてお  
越しになり人の目がだるいやうな事迄チヨイくなさいますではありませんか。こ  
の事はエルサレムで誰一人知らぬものは無いませんよ」

お花「ホ、、、神界の分らぬ人はそれだから困ると云ふのだ。お寅さんと守宮別さ  
んは切るに切られぬ神界の御因縁があつて、あゝしてゐられるのですよ。俗人の身  
として、さうして深遠微妙なる神界の御經綸が分りますか。アレニコレとはてんで  
根本の問題が違つてゐますよ。その理由は、到底一朝一夕にはお前さんの腹には入  
りませぬまいが、せめて三週間なりと、辨當持でお通ひなさい。先づ此問題から解決  
せねば貴方等の得心が行きませぬまい、その代りこの因縁が分つたら、いかなる鬼大蛇

でも、改心してアフィンとして開いた口がすほまりせんぞよ。ビックリして暈の來  
る大問題ですよ。それはく深くく深い、先の分らぬ三千世界のお經綸ですも  
の」

と得意氣に云ふ。

ブラバーサ「それは又ユツクリ承はる事としまして、焦眉の問題としてお寅さんの所在  
を探さねばなりませんまい。お花さん、何か心當りが無いませうかな」

お花「ヘンよう仰有いますわい。それは私の方からお尋ねしたいと思つてゐましたよ。  
同じ日出島の同胞じやありませんか、そんな腹の悪い白々しい。トボケ面せず、  
アアした、コウしたミアッサリ仰有つたらさうですか、あんまり罪が深う無いま  
すよ」

ブラバース 「之は近頃迷惑千萬、貴女のお口からかやうなお言葉を聞かうとは夢想だに致しませんでした」

お花 「私もアヤメのお花と云つて難波の里に於ては海千山千河千と云はれた女辯護士ですよ。チャンと顔色を一目見たら、お前さんの腹の中が皆分るのだから、サア、キッパリと白状しなさい。お寅さんが演説の邪魔したら、かつさらへて、きつかへつれて行つてくれと金の百兩もアラブに與へて置いて生捕つたのでせう。そんな事ア、チャンとこのお花の天眼通に映じて居りますわいな」

マリヤは息をはづませ乍ら

「お花さん、そら、あんまりじやういけませんか。聖師さんは、そんな腹の悪い方じやありませんよ」

お花 「おだまりなさい。好きな男の御最良をなさつても私の前では通用しませんよ。二人がコソコソと心を合し、大それた大陰謀を企らみ乍ら、知らぬ顔の半平衛で私の處で狐の七化、狸の入化式に親切ごかしに人の腹を探らうとヤツて來ても、尻尾が直に見えますから駄目ですよ。あのマア迷惑さうな顔わいのう」

ブラバース 「マリヤさん、もう歸りませう。到底このお花さんには、話が出来ませんわ」

お花 「コリヤ、マリヤのブランコ兩人、尻こそばいくなつて逃げ出すつもりか知らぬが、さうはさせませんぞや。チャンと警察署へ届けておいたから、待つて下さい。今に高等係がやつて來て、お前を拘引するだらう。そうすりや否でも應でも白状せねばなりませんまい。そんな處で耻をかくよりも、ソツミアツサリ私の前で白状

しなさい。さうすりや警察へは私の方から間違ひだつたと、願ひ下けをしてやるから、さうせ嫌疑のか、つたお前さんだから、逃れつこはありませんよ。フッフ、、、身から出た錆、己が刀で己が首、自縄自縛とはお前さん等の今日の場合だ。ようまあそんな心になれたもんだと思へば可愛想になつて来たわいのう、オーンくくく」  
と泣き真似し乍ら、ソット目に唾をつける。その、猾さ。酔でも、蕪蕪でも挺にも棒にも大砲でも行かぬ代物である。ブラバースは「此方の方から誣告を訴へる」と云ひ乍ら、憤然として立上り、細い路路を潜つてマリヤと共に大道をまつしぐらに己が草庵さして歸り行く。

(大正一四・八、一九、舊六・三〇、於由良海岸 北村隆光録)

### 第三章 草居谷底 (一八〇九)

トンク、テク、ツーロの三人は僧院ホテルの裏口から二人を擔いだ儘、一生懸命に道路、田畑の嫌ひなくかけ出し、キドロンの谷深く川邊を傳ふて登り行き、雨露を凌ぐ許りの自分の借家へ持ち運び、手荒く二人を土の上に投げつけた。守宮別はこの間に殆ど酔も醒め、丸い目をギョロづかせ、ウンと云つた限り、三人の顔を睨めつけて居る。お寅は勝氣の女とて大地に投げつけられた際、腰骨をうち乍ら痛さを耐へて、

お寅「こりや、三人のアラブ共、三千世界の救世主、底津岩根の大ミロク、日の出の神の太柱お寅さんの肉体を、お神輿さんとして、此處迄つれて来るのはいゝが、なぜ下ろす時にも些と氣をつけないのか、お神輿が些と許り損傷だぞよ、行儀も作法も知

らない馬鹿野郎だなア。サア私を此處まで連れて来た以上は、何か深い計割があつてのことだらう。きつぱりと白狀したがよい。何者に頼まれたかその譯を聞かう。これ／＼守宮別さん確りせんかいなア。何の爲めの強力だいな。それだから無茶苦茶に酒を呑みなさんなと云ふのぢや。お前さんはお前さんとした所で、龍宮の乙姫さんの生宮は何をして居るのだらう、ても扱ても氣の利かない人足許りだなア。こりやアラブ、早く神の前に白狀致さんか、神罰が當つて脛腰が立たんやうにしてもよいか」

トシク「ハ、ハ、ハ、ハ。氣違ひ違々、それや何アん吐してけつかる。誰にも頼まれはせん貴様の懐中にもつて居るお金が目的ぢや。地獄の沙汰も金次第ぢやからキリ／＼ちやつと渡したらよからう。グズ／＼致して居るに生命が無いぞよ。一方の野郎は酒

に喰ひ酔つて脛腰は立たず。高が婆の一人位、捻り潰すのは背の口ぢや。金を渡さ  
にや渡さんでよい。勝手に取つてやる。サア覺悟せい」

と猿臂をのびして、胸倉をグツと掴む。お寅はその刹那足を上げてトシクの擧丸を力一  
ばい蹴つた。トシクはウーンと云つた切り、地上に大の字になつて了つた。テク、ツ  
ロの二人は吃驚してトシクを呼び生げようとする。其隙を考へて守宮別はテクの足を  
グイと引張り俯向にドンと倒す。お寅はツロの首筋を鷲掴みにしながら拳骨を固め  
て六つ七つ撲り打ちに打ち据わせた。ツロはフラ／＼と眼が暈て又もやばたりと其處  
に倒れて仕舞つた。

お寅「サア、守宮別さん。其處の藤蔓をもつて動かないように、何奴も此奴も今の中に  
縛つておきなさい。これからこれ等三人を厳しく吃問してブラバサの陰謀を白狀

さしてやらねばなりませんまい。何と氣味の善い事、道は日の出の神の生宮だけあつて偉いものだらう。これ守宮別さん、日の出の神の生宮には感心したらうな、アラブの千匹萬匹來ることも、このお寅が、ふんこ一つ鼻息するや否や、何奴も此奴もバタ／＼と東京のバラックに二百十日の大風が吹いたやうにメチャ／＼に倒れて了ふのだよ。日の出神様も聖地へ來てから、だん／＼出世を遊ばし偉い御神徳の出來たものだ。もう此上は三千世界の救世主と名乗つても誰一人非難するものはあるまい、へ、へ、へ。でもさても愉快の事だわい。苦みの果には楽しみあり、萬難を排して勝利の都に達するとかや。お前さんも些と酒をやめて心の底から私の云ふ事を聞くのだよ。僧院ホテルでお前さんは何と云ふ馬鹿氣た演説をするのだわ。この私をブラバ―サと同じやうに餘り信じないと云つたぢやないか。肝腎要の參謀長がそんな考へ

をもつて居てさうしてこんな大望が成就しますか。些と心得なされ。餘り云ふ事を聞かないと小北山のお寅さんぢやないか、鼻を捻ますぞや」

守宮 「イヤもう改心致しました。朝顔形の猪口がメチャ／＼になつては耐りませんからなウフ、、、」

トシクはウン／＼と唸き出した。お寅はトシクの髻をグツと握り、

お寅 「これや、トシク恐れ入つたか。往生致したか。さうぢや、サア誰に頼まれた白狀致せ」

トシク 「ハイ、ハ、白狀致します。さうぞ其手を放して下さい髪が脱けます」

お寅 「ぬけたつて何だ。お前の頭ぢやないか。肉と一緒にコボンと取つてやる積りだ。苦しきや白狀なさい。魚心あれば水心だ。白狀さへすれば今迄の罪は神直日大直日

に見直し聞き直して許してやる。そして白状した褒美にお金をやるから、トットと白状したがよからうぞや。こう見てもこのお寅は、虎でもなければ狼でもない三千世の氏子を助ける生神様だからな。敵たうて来たものには鬼か大蛇になるお虎であるけれど、従つて来たものには結構な〜な大歡喜天の女神様ぢやぞね」

トク「ハイ、白状致します。その代りにテク、ツローの縛を解いてやつて下さい。私だけ助かつた所で仕方がありませんから」

お寅「これ〜守宮別さん、何んぢやいな、氣樂さうに煙草ばかり呑みつけて、ちつとお手傳いをなさらんか。氣の利かねぬ男だなア」

守宮「到底神様のお手傳ひは人間としては出来ませぬわい。マア悠りと見物でもさして貰ひませうかい。あた阿呆らしい。酒も無いのにこんな事を見て居られませうか、

お寅「お寅さんも仲々氣が荒いですなア」

「それや荒いとも、アラブの荒男を三人迄、荒肝を取つて荒料理をせうと云ふのだもの。随分靈驗な神様だよ。これアラブのトク大略でよいから早く誰に頼まれたと云ふ事を白状せんか。命取られるのが好いか。お金を貰ふのがよいか、どうぢや」

トク「實の所はお前さん所へ始終出入して居るヤクさんに頼まれました。ヤクさんが金を我々三人に二十兩宛下さいました。そしてお寅さんが劍呑になつて来た時は掻浚へて僧院の裏から何處かへ逃げて呉れと仰有つたのです」

お寅「ホ、、、甘い事、どこ迄も云ひ含めたものだなア。ブラバーサの奴、反問苦肉の策をつかいよつて、ヤクに頼まれたなんて、熱心の信者よこのお寅と喧嘩させようと思つて居やがるのだな。どこ〜迄も油斷のならぬき倒しものだ。これやト



ンク本當の事を云へ。ヤクさんちやあるまいがな」

トシク「イエ滅相な有體の事を申します。御靈城の受付をしてゐるヤクさんが、お前さんが僧院で演説をしられた時、聴衆の中へ入つてゐて、あまり聴衆の人氣が悪く殺氣が立ち、お前さんを殺してやらうと迄ひそく相談して居たものが有つたので、ヤクさんが心配して、傍に居つた私等三人に大枚二十圓宛をそつと懐中に入れ、さうかお寅さんと守宮別さんを擔いで此場を逃げて呉れ。さうせんとお二人の命が危いと嘸きましたので、二十圓のお金もつけにお二人さんを擔ぎ出しました。さうするとお前さんの懐中に、ガチャ／＼と餘り澤山の金が入つて居さうなので、此處迄來てから二重儲けをせうと思つて、一寸ごろついて見たのですよ。何うか耐へて下さい。しかし我々三人が無かつたらお前さんの生命が無かつたかも知れせんよ。

これが正直正銘一文の掛値のない所の白狀でゐいます」

お寅「フーン、さうかいな。でも扱てもブラバーサと云ふ奴は劍呑な奴だな。矢張り彼奴が此生宮を殺さうと思つて、聴衆の中に暴漢を匿まひ置きよつたのだなア。これトシクさんお前さんは、ブラバーサをどう思ひますか」

トシク「さうですな、さうか頭を放して下さい痛くて仕方がありませんわ。アイタ、痛いな」

お寅「餘り話に身が入つてお前の頭をブラバーサだと思ひ、力一杯痛めたのは悪かつた、まア耐へてお呉れ。これも時の災難だからな。これ／＼守宮別さん、話が分つた以上は、テク、ツローの縛を解いて上げて下さい。話を聴いて見ねば分らぬものだほんに氣の毒だつたな。とは云ふもの、三人が三人乍ら、俄にこのお寅を脅迫し

た罪は許されなから痛い目に遇つたからといて怒る事は出来まい、これで帳消だ。サアこれから改めてお前達三人と篤と相談をせう」

トク「悪にかけたら抜目のない我々三人、金になる事なら何んな御相談にも乗ります私だつてあのブラバースには深い〜意根がムいます。マリヤの奴を三人寄つて手籠になし、念佛講でもやり、樂しもうと思つて居た所へ彼のブラバースが、仕様も無い歌を歌つて来たものだから、折角仕組た芝居も肝腎の所でおぢやんになり、オチコウツトコ、ハテナの願望も遂げず、す〜と我家に歸つたものだから仲々伴のやつ承知をしません、オチコ、コテノミなつて、マストを立てそれはそれは夜半大騒動五人組が駈けだすやら、泥水が出るやら、へ、、、ン、いやもラッチもない事でした、アハ、、、」

守宮

「ウフ、、、そんな厚い唇で、眞黒な顔して居つて色のこひの鮎のつて、些々食過ぎて居るわい。併し乍らブラバースとマリヤに對し、さう云ふ経緯があり意根が残つて居るゝすれば何うだ、反對派の我々の仲間に入り、幾何でも金はやるからエルサレムの町に出て、ブラバース攻撃の大演説をやる氣は無いか」

トク「ハイそれは合ふたり叶ふたり、大にやります。のうテク、ツローお前達も賛成だらう」

テク「尤もだ、戀の敵のブラバース、カ一ぱい面皮を剥いでやり、このエルサレム町に居れないやうにしてやるのも痛快だ。腹癒せだ。流飲が下るようだ。ようし面白い〜、面白狸の腹鼓だ。喃、ツロー、何程辛うても、エルサレムの通路を縦横無盡にテクついてブラバースの罪狀をトクと市民に分るやうに、布留那の辯を揮つて

吹聴仕やうぢやないか」

トクク「ヤア面白い、大ミロクの生宮、日の出の神のお寅さんを大將軍と仰ぎ、守宮別様を參謀總長とし、エルサレムの町を三方四方から突撃と出かけやうかい」

お寅「これ／＼トククさん、決してヤクに頼まれたなごご云ふぢやありませんよ。ブラバースに頼まれて、あんな悪い事を致しましたが、日の出の神の御神力に怖れて罪亡ほしに白狀致しましたと大聲に云ふのだよ。分つたかな」

トクク「ハイ、事實を曲けて云ふのは間違ひやすうて些と許りやり悪くて困りますが、マア成可く貴女の爲になるやうブラバースを攻撃致しませう」

お寅「ブラバース憎む心はなけれど  
世人の爲に葬らんとぞ思ふ。

聖場を色で汚したマリヤ姫

千里の外に逐やりて見ん」

守宮「我は唯藥師如來がましまさば

如何な惱みも苦しからまじ。

酒呑めばいつも心は春の山

笑ひ乍らに花は咲くなり。

お寅さんお花さんでは氣がいかぬ

葡萄酒ビール酒が好物。

キリストも釋迦も孔子も神さんも

酒に比ぶりやしやうもない奴」

お寅 「又しても守宮別さんの罰當り

腸迄が腐つて居るぞや」

守宮 「くさつても酒と鯛とは味かよい

腐らん先に呑めばなほよし。

ドブ貝の腐つたやうな香ひより

酒の腐つた香よきかな」

お寅 「蟲の喰た松茸股にぶらさけて

腐れ貝とは何を云ふぞや」

トク 「くさいやつ三人五人集まつて

臭い相談谷底でする」

テ ク 「お寅さん手筈の糸を繰返し

マリヤの腹を突かんとぞする」

ツーロ 「つらうても彼の爲めなら町に出て

嫌な演説せねばなるまい」

お寅は 「さア早く此場を立つて歸りませう

お花が靈城に待つて居るだろ」

と云ひ乍ら、我營所を指して一行五人歸り行く。

(大正一四、八、一九、舊六、三〇、於由夏秋田別荘、加藤明子録)

第四章 誤 靈 城 (二八一〇)

お花は只一人、日の丸の掛軸の前に暗祈黙禱し乍ら、兩眼から雨の如き涙をたらし聖地の宣傳も豫期した如くに行かず、未だに一人の信徒も出来ぬ矢先、お寅、守宮別の在所が分らなくなつたので、太い吐息を洩らしてゐると、そこへ受付のヤクが慌しく歸り來り、

「コレもし、お花さんく」

「何回も矢繼早に呼ば、れ共、お花はキヨロリとヤクの顔を見乍ら、素知らぬ顔をしてゐる。」

ヤク「もしお花さん、これ文私が呼んでゐるのに、なぜ返事をして下さるんですか、

誓になられたんですか、餘り苛いちやありませんか」

お花「そんな人は居ないよ」

「プリンと横を向く。」

ヤク「ハ、ハア、コリヤ悪かつた。龍宮の乙姫さまの生宮様、あやめの花子殿、一寸こつちやを向いて下さい」

お花「お前はヤクかい。何の用だなア」

「とすましてゐる。」

ヤク「何の用もかんの用もありますかいな。乙姫さんは日の出神の生宮さんの所在が知れないのに、何してゐるのですか」

お花「何もして居ないよ。おつつけ歸つてゐるといふ御神示があつたから、餘り慌てる

には及びませぬワイ。チトお前さんも落つきなさい。この受付になつてから、殆んど一年にも成りますが、月給取る許りで、一人の信者も出来たでなし、私だつて困るぢやないか、些活動して下さいな。生宮様が悪者に攫はれて行かれるのを見て居り乍ら、助けにも行かぬといふやうな、ヤクザ人足のヤクさんには、もう龍宮の乙姫も相手にはなりませんな」

ヤク「私は此處の受付になつてから、餘り暇なので、これでは堪らないと思ひ、エルサレムの町中歩いて、紳士紳商を一々訪問し、ウラナイ教の宣傳をやり、生宮様の御威徳を盛に吹聴して居ります。何れも一日は感心して、一邊お話が聞きたい、其上で信者になり度いなき、異口同音に私の顔に免じて賛成しては下さいますが、何しろ生宮様の脱線がひどいので、何時も駄目になつて了ふのですよ。神様なら神さん

らしう、何時もチャンと靈城に立籠もつて、聲なくして人を呼ぶといふ態度をお取りになつて居れば可いのに、フンゾ喰ひの、ドブ酒のみの守宮別を連れて、アトラスの様な面をして、徳利をブラ下げた様な尻をして、市中をブラつかれるものだからあのスタイルでは、さうも尊敬の心が起らない。そして言ふ事が徹底してゐないから、要するに日の出島の氣違たらうといふ噂が立つて、誰も聞く者がありません。毎日毎日、こつ受付にチョコナンとコマ犬のように坐つて居つても用は無し、ダシジャコ並べた様な筆先を寫さして貰うて居つても、餘り有難くはありません。お前さんも、ようマア、あんな生宮さんと一緒にこんな所迄やつて来て、能う嫌にならん事ですな」

お花「コレ、ヤクさん、お前は何といふ勿体ない事をいふのだい、さうも靈に因縁のな

い者は仕方のない者だなア。あんな立派な救世主が、お前さんも矢張り世間並に悪く見るのかいな」

ヤク 「ハイ、何程最負目にみても、普通の人間より見れませんわ。第一仰有る事が筋が立つてゐませぬもの。教義が支離滅裂で掴まへ所が無くつて、既成宗教の方が、され丈立派だか知れませぬよ。私も此間からいろ／＼と就職口を考へて居りましたが、半氣違の生宮さん所に居つた者だからといつて、だアれも使つてくれないのです。それで止むを得ず、不快で／＼たまらないのを、辛抱して居るのです。併し乍ら躓く石も縁のはしとやら、縁あればこそ生宮様のお側で御用が出来たものだと思ひ、昨夜も昨夜とて、お寅さんの危難を救ふべく、會計の金を六十圓放り出してお寅さんを助ける工夫をしたんてすよ。其六十圓の金が無かつて御ろうじ、生宮さ

んは其場で袋叩きに會ひ、半死半生になつて居られるかも知れませぬよ。夜前トックに御歸りの筈なのに、まだ歸つてゐられぬのは、チツと不思議ですなア」

お花 「へん、能う言へます哩、現に生宮さんがアラブに取つ掴まへられた時、お前さんはジツと見て居つたぢないか。そんな嘘云つても、私しがチャンと見て居りますぞや」

ヤク 「乙姫さん……だつて、チツとして見てムつたぢやありませんか。神様でさへ手出しの出来ぬ亂暴者に、さうしてヤクが手出しが出来ませうぞ。其時の事情をマア聞いて下さい。そうすれば私の忠勤振がチツとは分るでせう」

お花 「へん、おいて貰ひませうかい、現在目の前に主人の危難を見乍ら、手も足も能う出さんクセに、忠勤振なんて鼠が笑いますぞや。此上文句があるなら言つて御覽」

ヤク「あります共、眞面目に聞いて下さい。今夜はキリストの聖日でもあり、僧院ホテルで大演説會があり、生宮さんも大々的獅子吼をなさるといふ事を聞いて居つたので、萬一を慮り、警戒の任に當つて居りますと、生宮様が衆人環視の前で、ブラバーサさんを罵り、言語同断な事を仰有るので、日頃ブラバーサを信頼してゐる信者連が腹を立て、あの氣違婆をやつつけてやらうかと、私が居るとは知らずに、コソ／＼相談をやつてゐますので此奴アたまらん、何にかして生宮さんを助け出さねばなるまいと、傍を見ればアラブが三人居つたので、ソツ金わたし、一時ごつかへ生宮を隠してくれと云つた所、アラブは早速諾いて、あの通りお二人の危急を救つたのです。夕べの騒ぎで市中は喧しい噂が立ち、警察の活動となつて居る相ですから、一時生宮さんもイキリぬきに、ごつかへ遊覽に行つてゐられるのでせう

。これでも私の忠勤振が分りませぬかなア」

お花「ても儲も、何んといふ下手な事をするのんだいな。何程ブラバーサの信者が手荒い事をせうと思つても、生宮様の御神徳には齒節は立ちませぬぞや。それに猶更、立派な警察もあり、人目もあるのだから、そんな心配は御無用だ、お前さんは永らく生宮様の側に居つて、あれ丈の御神徳が分らないのかな、ホンに盲聾といふ者は仕方のない者だなア」

ヤク「もし、お花さん、イヤ、ドツコイ、龍宮の乙姫さん、餘り盲々といふて下さいますな、御神徳の程度を知つて居ればこそ、私が案じて、あゝいふ手段を取つたのですよ、乙姫さんは日の出さんの御神力を買かぶつて居りますな」

お花「かもて下さるな、お前さん等のような子供に分つてたまるかな。大それた、大枚



六十圓の金をアラブにやるなんて、誰に許可を得て支出したのだら。生宮さんも乙姫も許した覚えはありませんぞや。其金こちらへ返して下さい、返すことが出来にや此月分と來月分とで勘定する。お前さんは受付だ、支拂ひ役は命じて無い筈だ。委託金費消罪で訴へませうか」

ヤク 「二つ目には法律をかへるごか、警察もいらぬよにするごか仰有るクセに、猫がクシヤミしたような事でも警察へ訴へるのですか、何とマア偉い神さんですな。お前さんは最前も雪隠の中から聞いて居れば、ブラバースやマリヤさんに向つて、世界中から珠數つなぎに信者が参つて來ると、エライ駄法螺を吹いてムつたが、こゝ一年程の間に猫の子一疋訪問した事は無いぢやありませんか。誠一つで開くウライナイの道だご云ひ乍ら、ようマア、あんな嘘が言へました。靈城なんて聞いて呆れます哩」

お花 「ホ、、、マア何と分らぬ代物だごご、これ程諸國の靈が、珠數つなぎになつて、生宮さんの神徳を慕つて参拜するのに分らんのかいな。それだから、教會ごも宣傳所ごもいはないで、御靈城ご書いてあるのだよ」

ヤク 「そんなら、私の受付は必要がないぢやありませんか。一体何の受付をするのですか」

お花 「身魂相應の理に仍つて、悪者が出て來たり、詐偽漢が出て來たりせぬ様に、番犬の御用がさしてあつたのだよ、靈なんて到底お前さん等にや分らないから、テンデそんなこと當にしてゐないのだ。頭から信用のないこと分つて居るんだからな」

ヤク 「そんなら何故宣傳に行け／＼と私に仰有るのですか」

お花 「現幽一致の御教だから、現界の人間も宣傳する必要があるのだ。けれ共お前の

魂がテンで物になつてゐないものだから物にならないのだよ。無用の長物娑婆さま。穀潰しの糞造器とはお前の事だ。こんな糞造器でも神様は至仁至愛だから、助けてやらうと思つて、三十圓も月給を出して飼つてやつて居るのだよ。世間に目の開いた奴があつたら……何と神様といふ者は偉い者だ。エルサレム中で相手にしてのない虫蛇の様な男でも、生神さんならこされ、三十圓も月給をやつておいて置けるのだ。神さんといふ者は倍も〜感心な者だ。……と此様に思つて青い鳥が引か、つて来る様に、つまり、おとりにおいて有るのだ……オットドッコイこりや云ふのぢやなかつた。コレ、ヤクさん、こりや嘘だよ。お前の副守が一寸私の体内を借つて云ふのだから、屹度氣にさへて下さるなや、オホ、、、」

ヤク「これで貴女方の腹の底はすつかり分りました。私も可い馬鹿でした。月給も何も

いりませぬ。氣好うお暇を下さい。其代り覺わてゐなさい。ヒヤッとする様な目にあわして上げますから。お前さん方のカラクリを、これから、エルサレムの町中演説して歩きますから、足許の明るい内トットと歸りなさい。イヒ、、、。ヤアこれで一つ俺も活氣が出来て来た。惡魔退治の張本人となり正々堂々の陣を張り、日出神の生宮と力比べだ。此奴ア面白い、ウッフ、、、」

お花は顔を曇らせ乍ら、

お花「コレ、ヤクさん。皆嘘だよ、お前は正直だから、直に腹を立て、仕方がない。日出神の生宮と此の姫の生宮が、天にも、地にもない大切な寶として、お前を重寶がつてるのだ。そんな水臭い事をいふもんぢやありませんがな」

と皺の寄つた顔の目を細うして、ヤクの背中をボンと叩く。年は老つて居つても、浪

速の水で洗ひさらした肌、まだ何處やらに花の香が残つてゐる。其手でお釋迦の顔撫でた式に、お花の色目につり込まれ、ヤクはつり上つた眉毛を一寸許り下へおろし、目尻迄下けて、時計の八時二十分の様な顔をし乍ら、

ヤク「へ、、、、そんな優しいお心ごは知らず、つい副守があんな事を囁きました。

どうぞ生宮さんがお歸りになつても、今の様な事は言はない様にして下さいや」

お花「何ぢやいな、ヤクさん、眉毛や目尻が眠り草の様に、サッパリ下つて了ひ、七時二十五分の顔ソックリぢやないかい」

ヤク「乙姫さんのお顔にも一時は低氣壓が襲來し、眉毛が十一時五分になつて居ました  
「や」

お花「そんな時計の話しや何うでもよい、人の顔と時計とゴチャ交ぜにしられぢや困る

からなア」

斯く話して居る所へ、ドヤ／＼と四五人の足音、ヤクは素早く表へ駆け出し、

ヤク「ヤ、これは／＼お二人様、能くマア御歸り下さいました。乙姫さまが太變なお待ちかねでゐいます。サア／＼とつと、奥へ御通りなさいませ」

お寅「お前はヤクザ者のヤクぢやないかい。妾があんな目に會つて居るのに傍觀してるとは餘りぢやないか。何程名はヤクでも、役に立たぬ代物だなア」

ヤク「ハイお花さん……オットドッコイ乙姫さんの生宮さんに、惨々そんな事をいつて油を絞られて居つた所ですから、どうぞ二重成敗は勘辨して下さい」  
といひ乍ら狭い路道を傳うて入つて來た。

お花「ヤ、これは／＼、能う歸つて下さいました。日出様、大變待ちかねてゐいます、

今ヤクと心配して居つた所でムいますよ」

お寅「へん、有難う、感じ入りました。貴女方の御親切には……ブラバーサの計略にかり、谷底へつれ込まれ、命を取られ様と致しましたが、幸に日出神の御神力によりまして、無事に歸つて参りました。乙姫さん、さぞ面くらつたでせう。ヤクと二人寄つて、日の出神の居らなくなつたのを幸ひ、此靈城の主人となり、一大飛躍を試みんとしてムつた所を、目的と牛の尻がひとは、向うから外れると申しましてね……誠にお氣の毒さま。へん巧言令色、偽善の御挨拶は止めて貰ひませうかい」

お花は泣聲を出して、

お花「コレ、モウシ、お寅さん、餘りぢやムいませぬか、私の心が分りませぬか。餘り

殺生ぢやムいませぬかい。十年此方眞心を盡して、世間の非難攻撃を受け乍ら、身命を賭して、貴女に付いて來た私ぢやムいませぬか。御冗談仰有るにも程があるぢやムいませぬか」

お寅「冗談ぢやありませんよ。誠生粹の日出神の言葉ですから、慎んでお聞きなさい。私の心が分らぬか……と仰有つたが、分つて居らこそ、お前さんに御禮を申して居るぢやありませんか、第一の証據は……いつも貴女言ふて居つたでせう。假令地獄のドン底へでも、命を的にお伴致しますと、口癖の様に、うるさい程、百萬遍をくる様に、云つておき乍ら、人の危難を見て、助けやうともせず、ヤクと一緒に、ぬつけりこもして靈城にをさまり返り、第二の計畫をやつて居つたのでせう。それに違ありませんまい。お前さんの様な水臭いお方は、主でもなければ、家來でもない。又

師匠でも無ければ弟子でもありません。乙姫さんなんて、チャンチャラ可笑しい、もう之から云ふて下さるな」

お花「私は素よりあやめのお花といつて、何も知らん者でムいしましたが、貴女が龍宮の乙姫の生宮だと仰有つて下さるので、それを誠信じ、今日迄乙姫で通して來ましたが、云ふてくれなと仰有るのなら、モウ之から言ひませぬ。そうすると、お前さんの日出神さんも可いかげんなもんぢやムいせんか。誰が阿呆らしい、乙姫の生宮と思へばこそ、住なれた自轉倒島を立つて、こんな他國で、不自由な生活を辛抱してゐるんですよ」

ヤク「もしく乙姫さん、否お花さんにしておきませう。こんな糞婆と縁を切りなさいませ。私がお前さんの參謀長となつて、お寅さんの向方を張り、立派に一旗擧げて

御覽にいれませう、私がお花さんの赤心は能う知つてゐます。側から聞いてゐても餘り無体な事いふ婆だから、愛相が盡きた。お花さん、可い縁の切時だから、覺悟なさいませ」

お花「……………」

お寅「コリヤ、ヤク、何を横槍入れるのだ。お師匠様が弟子に向つて意見をしてるのにヤクザ人足がゴテ／＼いふと云ふ事があるものか、ひつ込んで居なさい。お前の出る幕ぢやない。お前とお花さんと寄つて、妾をんなな目に會はしたのだからな。チヤンと此處に三人の証據人が連れて來てあるのだから……………」

ヤク「ア、ア、分らずや許りの所に居つても仕方が無いワ。お花さん、左様なら。又お目にかゝりませう、お寅婆アさん左様なら、守宮別と精々意茶つきなさい。私は私

の考へを以て、何處迄もお前さんの目的の妨害をして上げますから、イヒ、

「」  
と腮をしやくり、そこにあつた箒を一本かたげたま、尻ひんまくり、何處ともなく駈出して丁つた。此奴逆がしてなるものか、お寅は金切聲を張上げ、でつかいお尻をプリン／＼振廻し乍ら、埃に汚れた雑踏の街を人目も眦じず追つかけて行く。お寅はヤッど追付き、首筋を掴まんとするや、ヤクは箒で大道の砂埃をまぜ返し、お寅の顔をボンと撲り乍ら又もや駈け出す、お寅は兩眼に土埃を浴び、皺枯聲を張上げ、

「オーイ／＼誰でも可いから、其ヤクを掴まへて呉れ」

と叫んでゐる。道行く人は黒山の如くお寅の周囲を取まき、見世物でも見る様に口々に罵つて居る。

(大正一四、六、三〇、舊八、一九、於丹後由良秋田別荘、松村眞澄録)

瑞 月

あほ烏夕を告ぐる世の中に

あかつきうたふかさゝぎの聲

千年経る鶴は枯れたる松ヶ枝に

すくう例のなきぞかしこき

第五章 横

戀

慕 (一八一)

ヤクの後をおつけて夜叉の如くにお寅は靈城をどび出して終つた。トック、テク  
ツローの三人はお寅の後をおひ搜索がてらに三人三方へ手分けをして市中の大路小路  
をかけ廻ることゝなつた。後にはお花守宮別の兩人が丸い卓を圍んで籐椅子に尻を  
かけ乍ら、ヤ、暫し無言の儘、顔を見合して居た。

守宮 「アア、ア」

と大欠伸をし乍ら、

守宮 「お花さん」

と云ふ。

お花 「何ですか」

守宮 「アア、お花さん」

お花 「何ですか」

守宮 「アア、お花さんたら……」

お花 「何ですいな、アタ辛氣臭い。御用があるなら云つて下さいな」

守宮 「アア、大概分りさうなものだな、ホントニ〜」

お花 「生宮さんが居られないので淋しいのですか、嘸御退屈でせう」

守宮 「アア、これお花さん、分りませんか」

お花 「分りませんな」

守宮 「へー、私がアアと云へば大抵きまつてるでせう」

お花「いつも守宮別さんが、アーンと云つて空むいて欠伸をされたが最後クレリと氣が變つて今迄やつて居た仕事も打ちやり、漂然として何處かへ行つて了ひ、いつもお寅さんの氣をもますが、お花では一向氣をもみませんで仕方がありませんね」

守宮「アア、サ……ケ……」

お花「ホ、、、酒が欲しいと仰有るのか、お安い御用。然し乍らお寅さんの留守中にお酒でも、飲まさうものなら、され丈怒られるか知れませんが。それでなくても、あんなに私に毒ついて行かれたのですからマア暫く辛抱しなさい。やがて歸られるでせうから」

守宮「イヤ、もうお寅さんの自我心の強いこと、無茶理屈をこねる事、疑惑心の深い事には愛憎が盡きました。もうお寅さんは今日限り見限るつもりです」

お花「へ、ん、うまい事仰有いますわい。寢ては夢、起ては現、一秒間も忘れた事が無い癖に、よう、そんな白々しい事が、仰有られますわい。守宮別さんも餘程の苦勞人だな。色情の道にかけては千軍萬馬の劫を経た、このお花も三舎を避けて降服致しますわ」

守宮「いや、全く、いやになりました。あのアーンの欠伸を境界線として、お寅さんの事はフツリと思ひ切りました。それよりも純眞な、正直な都育ちの婦人が欲しいものですわ。チト位年はとつてゐても第一、膚が違ひますからな」

お花「これ守宮別さん、そんな冗談を云はれますと、お寅さんに又鼻を捻られますよ」  
守宮「もうお寅さんだつて縁きつた以上は赤の他人だ。鼻でも捻やうものなら、ダメッて居ません。私も男ですもの、直様エルサルム署へ訴へてやりますからな」



お花「本當に守宮別さん、いやになつたのですか、嘘でせう」

守宮「何、眞剣ですよ。乙姫さんの前ですもの、どうして嘘が云へませうか」

お花「貴方の仰有る事が本當なら私の腹も打明けますが、此お花も今日云ふ今日は、

お寅さんにスツカリ愛憎が盡きたのですよ。これから國許に歸らうかと思案してゐますの。が然し、長途の旅、一人歸る譯にも行かず、外國人との話も出来ず困つてゐますの。貴方のやうな英語の出来る方があれば、一緒にお伴さして貰へば結構ですが、世の中は思ふやうにはならぬものでしてな」

守宮「お花さん、歸らうと云つたつて、旅費が要りますが一体いくら許り持つてゐますか」

お花「ハイ、娘が家を抵當に入れて金を拵へたと云つて、一萬兩許り送つて來ましたの

で當地の郵便局に預けて置きましたから旅費には困りませんまい」

守宮別は、お花が一萬兩持つてゐるのを聞いて、猫のやうに喉をならし、目を細うし……

「ヤ、此奴は豪氣だ。二千兩もあれば旅費には澤山だ。何となくしてその他の金を酒の飲み代にすれば一年や二年は大丈夫だ。先づお花の歡心を得るのが上分別だ、お寅に丁度毒づかれて居る處だから、こゝでお寅の師弟關係を絶たせ、自分が世話になつたり世話したりする方が、よつほきほろい」

とニタリと笑ひ乍ら

守宮「お花さん。一萬兩の金があれば今かへるのは惜いじやありませんか、どうです、その金で一旗上げやうじやありませんか。何程お寅さんを大將に仰いで、シヤチに

なつた處であの脱線振と云ひ、こゝう人氣が悪うなつちや、駄目でせう。龍宮の乙姫さんは今迄愆なお方で寶を貯へてゐられたさうだが、時節参りて良の金神さんが三千世界の太柱とおなり遊ばすについて、第一に寶を投げ出し、改心の標本をお見せなさつたお方でせう。お道のため一萬兩のお金をオッ放り出す考へはありませんかな。何程お寅さんに肩入れした處で、盪を淵に投入れるやうなものですよ。何程お金を費しても無駄に使つては何にもなりませんからな」

お花「さうだと云つて確な保証を握つておかねば、此大切なお金を貴方のお間に合わせる譯には行きません。お寅さんとは又特別な御關係がおありなさるのだから」

守宮「いや、もう愛憎がつかしました。あのアアアの欠伸を境界線としてブツッリ思ひ切つたのですよ。お寅さんがお花さんだつたらなアと、このやうに思つた事は幾度あ

つたか知れませんか

お花「ホ、、、あの守宮別さんのお上手なこと、流石の女殺、うまい事仰有いますわい、うつかり、のらうものなら、それこそ谷底へおとされて、身の破滅に合ふかも知れませんかよ。

「きれたくは世間の噂

水に浮草、根は切れぬ」

「きれて終へば他人ぢやけれぬ

人が悪う云へや腹が立つ」

とか云ふ歌の通り、何程うまい事仰有つても、そんな、あまい口には乗ること、出来ませんわい、ホ、、、」

守宮「何、お花さん、本眞劍ですよ、私は、こうして十年許りもお寅さんに辛抱してついで来ました、到底やりきれませんから、もう思ひ切りました。これが違ひましたら一つよりない首を十でも二十でも上げますわ」

お花「ホ、、、お前さんの首を貰つたつて、首祭する譯にも行かず、眞人の根付には大きすぎるし、枕には堅すぎるし、何にもなりませんわい。それよりお前さんの誠の魂を頂き度いものですか」

守宮「いかにも、魂あげませう。サア、ここからなりと、あぐつて、とつて下さい」

と胸をつき出す、

お花「嘘じゃムいせんか」

守宮「嘘と思はれるなら此短刀で私の胸を切り裂いて生肝をとつて下さい。それが第一証據ですわい。男子の一言は金鐵より堅いのですよ」

お花「いや分かりました、心底見届けました。いかにも御立派な御精神そんなら…あの…それ…ここ迄も私と〇〇を締結して下さるでせうね」

守宮「頭先から爪先までお花さんに献けました、焚いて食ふなと焼いて喰うなと御勝手に御使用下さいませ。この守宮別は唯々諸々として乙姫さんには維命これ迄ふ迄です。絶対服従を誓ひます。その代り酒丈は飲まして下さるでせうな」

お花「そらそうですとも、お互さんですわ、私だつて、貴方に要求すべき事があるんですもの」

守宮「とかく浮世は色と酒…何程雪隠の水つきだ、糞浮きだ、世間の人云はうとも

惚た私の目から見れば十七八のお花さんですわ。私は肉体に惚たのじやありません  
お花さんの精霊が第一天國の天人として、華やかな姿でゐらつしやるのを、靈眼を  
通して見て心から惚たのですもの。ア、お花さんの事を思ふて心臓の鼓動が烈しく  
なり、息がつまる様になつて來た。何と戀と云ふものは曲物だな。何で、こんな變  
な氣になるのだらう」

お花 「戀は神聖だと云ふぢやありませんか。世の中は凡て理智許りでは行きません、情  
がなければ此世の中は殺風景なものですよ」

守宮 「貴方、随分戀愛問題には徹底してゐますね、私感服しましたよ」

お花 「そら、さうですとも。數十年間、戀の巷に育ち、數多の男女を操つて來た經驗が  
ありますから、戀愛問題にかけては本家本元ですわ。親が子を慕ひ、子が親に會ひ

度いとあこがれるのが戀です。又一切のものを可愛がるのが愛です、戀と云ふも  
の一人對一人の關係で、云はゞ極めて狹隘な集中的なものですわ、さうか守宮別  
さん、戀と愛とをかねて私に集中して下さい。さうすれば私も貴方に對し愛と戀と  
を集中します。こゝに於て初めて戀愛の神聖が保れるのですからな。かりにもお寅  
さんの事を思つたら、戀愛の集中點が狂ひ戀愛が千里先に遁走しますよ」

守宮 「成程、徹底したものだ、お花さんのお話を聞けば聞く程、益々集中的になつ來  
ますよ。假令岩石が流れて空氣球が沈んでも貴方の事は忘れませんわ」

お花 「くさいやうですが、お寅さんの事は忘れるでせうな」

守宮 「勿論です。今後は顔合はしても物も云ひませんから安心して下さい」

お花 「間違ひありませんな。もし違つたら貴方の喉首を喰ひ切りますが御承知ですか」

守宮 「戀愛を味はふと思へば生命がけだな。イヤ心得ました、承知しました」

お花 「こゝ迄話がまどまつた以上は、善は急げですから一寸心祝に媒介人はないけど、龍宮の乙姫さんと大廣木正宗さんを仲介人にし、守宮別さんお花さんの肉体の結婚式を挙げやうぢやありませんか」

守宮 「宜しい、早速準備して下さい」

お花は目を細くし乍ら

「ハイ」

こゝ一言釋をかけ、酒の煙にどりかゝつた。日の出の掛軸の前でキチンと坐り祝言の盃をやつてゐると、そこへ足音荒々しくお寅が歸つて來た。

お寅 「マァーくく、お二人さん、お楽しみ、お羨山吹さん。これ、お花さん、その

態は何じやいな。人の留守中に人の男をどらまへて酒を飲むとはあんまりぢやないか。こゝには禁酒禁煙の制札がかけてあるのを何と心得てゐますか。内から規則破りをしてよいのですか」

お花は平然として落つき拂ひ、

お花 「お寅さん、お構ひ御無用です。私は龍宮の乙姫でもなければ貴方のお弟子でもありません。貴方の方からキッパリとお暇を下さつたのだから、もはや貴方は路傍相會ふ人と同じく赤の他八です。それ故お前さんの意見を聞く必要もなければ遠慮する必要もありません。ラブ、イズ、ベストを實行して、只今守宮別さんと二世三世は愚、億萬歳の後までも夫婦約束の祝言の盃をした所でゐます。チット許りお氣がもめるか知れませんが御免下さいませ、ホ、、、」

お寅は萬面朱をそ、ぎ半狂亂の如くなつて、

お寅「これ守宮別さん、お前は、私との約束を反古になさるのかい、サア約束通り命を貰ひませう」

守宮「ハッハ、、、お寅さん以上に愛する女が出来たものだから、愛の深い方へ鞍替したのですよ。それが戀愛の精神ですから。さうか今迄の悪縁を諦めて下さい。酒を一杯のんでもゴテ／＼云はれるやうな不親切な女房では、やりきれませんからな」

お寅「こりやお花のド倒しもの、人の男を寝とりやがつて思ひ知つたがよからうぞ」  
と云ふより早く、そこにあつた角火鉢を頭上高く振り上げ、お花と守宮別との真中を目がけて投げつけた。灰は濛々と立上り咫尺暗澹となつた。お寅はあまりの腹立しさ

に氣も狂亂しドッと尻餅をついたまゝ、息がつまり口をアングリ、鮎が泥に酔ふたやうに上唇、下唇をバク／＼かち合せてゐる、その隙に乗り守宮別はお花と共に永居は恐れと、細い路次を潜つて橄欖山の方面さして逃げて行く。

(大正一四、八、一九、舊六、三〇、於由良、北村隆光録)

瑞 月

潜龍も時こそ來たれ淵を出で

大空高く登らんとぞする

瑞月

わが延にほに陽はさしそめてまがつみの

影は次第に消ね亡せにけり

澄わたる朝の大空ながむれば

眞如の大陽暉き渡る

第二篇 鬼 薊 の 花

## 第六章 金酒結婚（一八二）

守宮別はお花と共に、お寅の靈城を逃げ出し七八町來た横町のカフェーに入り、此處迄落ち延びれば先づ安心と、コップ酒をきこし召すべく、嫌がるお花の手を引ひて無理に奥座敷へ通つた。

守宮「オイ、女房、イヤお花、肝腎の祝言の盃の最中に、お寅の極道が歸つてうせものだから、恰度百花爛熳と咲き匂ふ花の林に、嵐が吹いたやうなものだつた。殺風景極まる。折角お前の注いで呉れた酒を膝の上に落して仕舞ひ、氣分が悪くて仕様が無いから、改めて此處で祝言の心持で一杯やらうぢやないか」

お花「如何にも、妾だつて貴方の情のお汁のお神酒があまり慌てたものだから皆口の外



に溢れて仕舞ひ、三分の一も入っておりませんわ。こゝ迄来れば大丈夫です。悠くりとやりませうか。一生一代のお祝ですからなア。併しお寅さんが後追かけてでも来たら、一寸困りますがなア」

守宮 「ナアニ、尻餅ついて氣絶して居るのだから、滅多に来る氣遣ひは無い。もし来たつて何んだ。夫婦が盃をして居るのにゴテ／＼云ふ権利もあるまい。そんな事に心配して居ては悪魔の世の中だ、一日もちつとして居られ無い。神様のお道もお道だが、人間は衣食住の道も大切だから、吾々も夫れ相當にやらねばならぬからなア」

斯く話して居る所へカフェエの給仕が眞白のエプロンを掛け、コーヒーを運んで来て、

女中 「モシお客さん、何を致しませうかなア」

守宮 「ウン、先づ第一にお酒を一本つけて呉れ。さうして鰻の蒲焼に鯛の刺身、淡泊した吸物に猪口を一つ手輕う頼むよ」

女中 「藝者はお呼びになりませんか、何なら旦那さんに適當な別品がムいますよ」

守宮 「ウーン、さうだなア」

女中 「モシお母さん、粹を利かして上げて下さいな。何と云つても、まだお若いんですからな。藝者が無いとお酒が甘く進みませんからなア」

お花 「ヤ、また必要が有つたらお願ひませう。兎も角お酒を願ひませう」

と稍プリンとして居る。女は足早に表へ立ち去つた。お花の顔には暗雲が漂ふた。

お花 「これ守宮別さん、一本だけ呑んで此處を立ち去りませうか、本當に馬鹿にして居

るぢやないか。奥さんとも云はず、お母さんなんて馬鹿らしくて居られませんワ」

守宮「マア好いちやないか、お母さんと見られたら尙ほ結構だよ。人は老人に見ゆる程  
價值があるのだからア」

お花「それだ云つて餘り人を馬鹿にして居ますわ」

かく話す所へ以前の女は酒肴の用意を調へ運び來り、

女中「お客様甚うお待たせ致しました。御用がムいましたら何卒手を打つて下さい」

守宮別はこの女の何處とも無しに色白く、目許涼しく、初い／＼しい所があるのに  
氣を取られ口角から、粘つたものを二三寸許り落しかけた。此道へかけては勇者のお花  
何條見逃すべき、女の立ち去るを待つて守宮別の胸倉をグツと取り、三つ四つ揺すり  
お花「これや、妾を馬鹿にするのかい、見つともない目尻を下けたり涎を繰つたり、あ

んな賣女がそれ程氣に入るのか、腐つた靈魂だなア、サア此短刀で腹を切つて貰ひ  
ませう」

守宮「まあ／＼待つてくれ、さう取り違をしてくれると困るよ。涎を繰つたのは喉の  
虫が催促して待つて居つた酒を呑みたい爲めだ。目を細うしたのも矢張り酒が呑み  
たいからだ。何の立派なく、神徳の満ち充ちた、何ぬげ目のないお花さんの顔を  
見て居て、何うして外に心が散るものか。お前は些こヒステリックの氣があるから  
困るよ。さう一々疑つて貰つては困る。お寅だつて其處迄の疑惑は廻さなんだよ」

お花「さうでせう、矢張りお寅さんがお氣に入るでせう。私は餘程よい間拔だからお前  
さんに欺されてこんな所迄釣り出されたのですよ。オ、怖や／＼、こんな男にうつ  
かり呆けて居らう者なら、折角國許から送つて來た金を皆飲み倒され、賣女の賣收

費に取られて了ふのだつた。あ、い、所で氣が付いた。これも全く、龍宮の乙姫様が此男は油断がならぬぞよ。何程口で甘い事申ても乗るでないぞよ。後の後悔間に合はんぞよ。とお知らせ下さつたのだらう。あ、乙姫様有難うございます。私は本當に馬鹿でございました。オン／＼／＼」

と泣き沈む。

守宮

「こりやお花、さうぶり／＼と怒つて呉れては困るぢやないか。疑もよい加減に晴らしたら好いぢやないか。酒の上で云ふた事を目のつほに取つて、さう攻撃せられちや、如何に勇猛な海軍中佐でも遣り切れんぢやないか。酒の上で云ふた事はマアあつさり見直し聞き直すんぢやないア」

お花

「まだ、一口も呑みもせん癖に酒の上では能う云へたものです哩」

守宮

「顔見た許りで氣がいくならば……酒呑みや樽見て酔ふだらう」といふ文句をお前が何時も唄つて居るだらう。併しあの文句は實際とは正反對だ。私はお前の顔を見るに氣が變になつて了ふのだ。それと同じに烟徳利を見ると恍惚として微醉氣分になつて了ふのだから、如何かさう御承知願ひたひ。さう矢蓋しく云はれると酒の味が不味くなつて仕方がない」

お花

「それやソウでせうとも、カフェーの白首を見た目で鞆苦茶の妾の顔を御覽になつたつて、お酒の美味しい筈がムいませんわ。サア／＼貴方悠くりとお酒を召上つて代價を拂つてお歸りなさい。妾はもう斯んな街される所で一時も居るのが苦痛ですわ貴方はまるで、妾の首を裁ち割るやうな。わぐい目に會はして下さいませ。あ、こんな事なら約束をせなかつたら宜かつたになア」

守宮別は自暴自棄になり一萬兩の金を放る積りで、態も太ふ出て見た。

守宮 「お花さん、夫婦約束を取り消したいと仰有るのですか、何程私が可愛と思つても、お前さんの方から約束するぢやなかつたに云ふやうな愛憎盡かしが出る以上は取り消し度いと云ふお考へでせう。守宮別もお花さんに海洋萬里の空で見棄てられ愛憎盡かされるのも結句光榮です。サアさうぞ縁を切つて下さい。些ども御遠慮は要りませんからなア」

お花 「これ氣の早い守宮別さん。誰が縁を切るに云ひましたか、今となつて縁を切るやうな浅い考へで約束は致しませんよ。そんな事云つて貴方は此お花が嫌になつたものだから逃げ出すさうにするのでせう」

守宮 「馬鹿云ふな、お前の方から此處を逃げ出すと云つたぢやないか、賣女とお樂し

みなさいなぞと散々悪口をつき、此夫に對し愛憎盡しを云つたらう。俺も軍人だ、女々しい事は云はない。嫌なものを無理に添ふてくれとは要求せぬ。此縁が繋がるに繋がらぬとはお前の心一つぢやないか」

お花 「やあ、それで貴方の誠意が分かりました。何處迄も妾と添ふて下さるでせうな本當に憎い程可愛いわ」

守宮別の肩にぶら下る。

守宮 「これや無茶をすな、お酒がこぼれるぢやないか、餘り見つとも好くないぞ。それ／＼カフェーの女中の足音が聞けて来た」

お花 「へん、來たつて何です、天下晴れての夫婦ぢやありませんか。カフェーの女中にこのお目出たいお安うない所を見せつけてやるのが痛快ですわ。ほんまにお母さん

なき、人を馬鹿にして居るぢやないか。ね、守宮別さん、妾と貴方は假令天が地となり地が天となり、三千世界が跡形もなく壊滅しても、心と心のピッタリ會ふた戀の花實は永久に絶へませんわネエ」

守宮 「ウン、それやさうだ。お寅が嘸今頃にや死物狂になつて俺の後を探して居るだらうが、實に痛快ぢやないか」

お花 「お寅の事は一生云はんといつたぢやありませんか。矢張り未練があると思つて、ちよいと言葉の先に現はれますなあ。エ、悔やしい」

と力一ぱい頬邊を抓ねる。

守宮 「これや無茶をするな、放せ〜放さんか」

お花 「この頬邊がチ切れる所迄放しませんよ」

と益々引つ張る。守宮別は目から鼻から口から液を垂らして、「アイタ、〜、」と小聲で叫んで居る。其處へ女中の足音がしたのでお花はバツと放した。

守宮 「あ怖ろしいお前は女だなあ、今迄こんな女とは知らなかつたよ。本當に猛烈なものだなア」

お花 「さうですとも、人殺のお花と異名を取つた強者ですよ。若い時は妾のレツテルで及物持たずと幾人を殺したか分かりませんもの」

と意茶づいて居る。

女中 「お客様、お代りは如何ですか」

守宮別は慌て、ハンカチーフで顔の涙や鼻液を拭きながら、

守宮 「ア、何でも宜いからさつきり持つて来い、兵站部は此處に女房が控へて居るから

な……」

お花「どうか熱燗で澤山淡泊したも何か持って来て下さい。お金は構いませんからその代り藝者などは駄目ですよ、女房の妾がついて居ますから」

女中「あ、これはく奥さんでムいましたか。先刻はお母さんなど見そこないしまして失禮しました。それでは藝者などの必要はムいますまい。ホ、ホ、」

守宮「これお花、氣の利かない事夥しいではないか。お前と私は年が母子程違ふのだから、女中がさう云へば夫れでよいぢやないか。俺の目になんほ十七八に見ても世間から見れば六十の尻を作つたお婆アさんだからなア」

お花「母子だなんて、そんな偽りを云ふものぢやありません。又夫婦だ云ふて置けば

藝者など煩さい世話をせうと申しませんからなア」

守宮「如何にも御尤も、さうしてもお花は俺とは一枚役者が上だわい、エヘ、」

表には労働者が、コップ酒をあふりながら四邊かまわず喋つて居る。

「オイ、トンク、ほろい事をやつたぢやないか。あのお寅婆アさんを助けに行つて大枚二十圓づつ。これで十日や廿日は氣樂に酒が呑めると云ふものぢや。時にあのお寅について居る、蝶蠟とカ蛸とカ云ふ男、あれはテッキリお寅のレコかも知れないよ。お寅の奴、いつも自分の弟子だくと吐してけつかるが、あれは屹度くつ、いてけつかるのだらう。その証據を押けて一つ強請つてやつたら又二十圓や三十圓は儲かるだらうからなア」

トンク「これテク、そんな勿体ない事云ふな。先方は神様ぢやないか、おまけに我等三

人はお寅さんの神力に一耐りもなく打つ倒され、命の無い所を助けて貰ひ、其上重大の使命迄仰せつかつて居るのぢやないか。金が欲しかつたらお寅さんに云へば幾何でも呉れるよ。あの時も金が欲しけれや幾何でもやるぞ云つたぢやないか」

テク「それやさつちや、まあ悠くりとポツ／＼に絞り取る事にせうかい。時にツローは何處に行きよつたのだらうかなア」

トク「彼奴は何だか、ヤクの跡を追ふておつかけて行つたぢやないか、ヤクを捉まへて、お寅さんの前に引きづり出し、褒美の金に有り付かうと思つて、抜け目なく駆け出しやがつたのだよ」

テク「併し、裏の座敷に一寸俺が最前小便しに行つた時、チラッと目についた客は、もうも守宮別とお花さんのやうだつたが、箸まめの守宮別さんの事だから、お寅さん

の目を忍んで、お花さんと内証で、〇〇をやつて居るのぢやなからうかな」

トク「何、お花さんと守宮別が裏に居ると云ふのか、あゝそいつは面白い。サア復二十圓だ」

と云ひ乍ら兩人は裏座敷を指して忍び行く。

(大正一四、八、一カ、舊六、三〇、於由良秋山別荘、加藤明子録)

瑞 月

すみきりし朝の大陽大空に

真如の光投げてかゞやく

第七章 虎

角（一八一三）

守宮別お花の二人は奥の一間で、酒汲みかわし乍ら、意茶付き喧嘩をやつて居る所へ、トンク、テク兩人は盗人猫が不在の家を覗くようなスタイルで、スーツと顔をつき出した。お花は早くも二人の姿を見てこり

お花「ヤ、お前はお寅さんご一所に靈城へやつて來たトンク、テクの兩人ぢやないかい何ぞ御用があるのかな」

トンクは右の手で額を二つ三つ叩き乍ら、

トンク「イヤ、ごうも、誠に濟んませぬ。些と許り酒代が頂戴致したいので、……」  
お花「お前はお寅さんの御家來ぢやないか。妾に些ども關係はありませぬよ、酒代が欲

しけら、お寅さんに貰つて來なさい、ノコノコと失禮な、人の座敷へ入つて來て、盗猫のやうに、黒ん坊のクセに何んぢやいな」

トンク「お前さんに直接の關係はありますまいが、こゝにムる守宮別さんには深く關係があるのです。……これはく守宮別様、大變お樂みの所を、不粹な黒ん坊が二人もやつて來まして、嘸御迷惑でもムいませうが、チツと許り口藥が頂戴致したいのでムいますよ」

お花「何、口藥が放しいと云ふのかい、守宮別さまの暗い影でも掴んだといふのかい」  
トンク「ハッハ、、、白々しい事を仰有いますな、大變なロマンスを見届けてあればこそ、こうして口藥を頂戴に參つたのです。ゴテく云はずに、ザツと二十圓、二人でんで四十圓、アッサリと下さいな、安いものでせう」



お花は之を聞いて、守宮別がお寅以外に女でも推へて居るのではあるまいか。そこを此トシクに見つけられて、弱點を握られてるのだらう、何と氣の多い男だなア。……と稍嫉妬心が起り出し、

お花「これ、守宮別さん、お前さんは又してもく、著まめな事をしてゐるのだろ、サ、トシクさんごやう、あつさりご云ふて下さい、そうすりや、お金は二十圓はさておいて、五十圓でも百圓でも上げます」

守宮「コレお花、こんな者に、そう金をやる必要がどこにある。相手にしなさんな」

お花「そらそうでせう、妾がトシクさんを相手にするご、チミ、あなたの御都合が悪いでせう。コレトシクさん、遠慮はいりませぬ、ごつご、守宮別さんのローマンスをスッパリご、此場でさらけ出して下さい」

トシク「ハイ有難う、屹度百圓くれますな」

お花「併し二人に百圓だよ。取違して貰ふご困るからな」

トシク「ハイ宜しあす、此守宮別さんは、お寅さんご何時も師匠ご弟子のような顔をして、殊勝な事をいふてゐられますが、其實内証でくつ、いてゐるのですよ。私や、いつやらの晩、橄欖山の入り口で、怪体な所を見て置きました。なア守宮別さん、其時あなた、人に言つちや可けないよ……ご云つて私に十圓呉れましたね」

守宮「ウン確かにやつた覺がある、併しそれをさうしたごいふのだ。そんなごた、お花さんの前で言つた所で三文の價値も無いぢやないか。お花さんだつて、今日迄の俺ごお寅さんごの關係は御承知だからなア」

トシク「それでも、あなた、ごういふ事を世間へ發表せうものなら、貴方もチツごは困

るでせう」

お花「阿呆らしい、トンクさん、そんなことなら聞かして貰はいても可いのだよ。此  
守宮別さんが、外の女と怪しい關係があつたか無かつたか、それが聞かしてほしか  
つたのだよ。確な證據はなくても、この家で酒を呑んで居つたとか、意茶ついて  
居つたとか、夫れが分れば可いのだからな」

トンク「へ、五十圓なら申上げます。エルサレムの横町のカフェーの奥で、お花さんと  
守宮別さんが一杯やり乍ら、夫婦約束をしたり、頬べたを掴つたり、肩にブラ下つ  
たり、それはく見るに見られぬ醜体を演じてをられました、事を私許りぢやなく  
、この女中が證人ですよ。それも今月今日、サ五十圓、二人でシメて百圓、如何  
です安いもんでせうがな」

守宮「フッフ、、、此奴ア面白い。マー杯やつたらどうだ」

ニコップをつき出す、お花は眉を逆立て、聲を尖らし乍ら、

お花「ヘン、あほらしい、業々し相に、何のこつちやいな。五十兩もお前さん等にやる  
ような、金があつたら、ヨルダン川へでも放かしますわいな」

トンク「宜しい、お前さんが其了見なら、直様お寅さんへ注進致しますよ」

お花「どうぞ注進して下さい。そして守宮別さんと此お花との交情のこまやかな所を、お  
寅さんにつぶさに報告し、忠勤振を發揮なさいませ。最早此お花はお寅さんと手を  
切り、守宮別さんとは天下晴れて、切つても切れぬ夫婦ですよ。どうか、お寅さん  
に守宮別さん夫婦が宜しう傳へたと仰有つて下さい。そしてエルサレムの市中へ、  
妾達夫婦の結婚式を挙げた事を、駄賃をよう出しませぬが、披露をして下さい」

トク「エー、クソ面白くもない。ようし、これから、一つお寅にたきつけてやらう」  
とテクと共に千鳥足し乍ら、カフェーを立出で、お寅の靈城へ註進の爲忍び行く。

お寅は守宮別、お花の打つて變つた愛想づかしと無情な仕打に、憤慨の餘り逆上し  
暫時庭の土の上に倒れてゐるが、漸く氣が付き、邊りを見れば、箱火鉢は腹を破つて  
木葉微塵となり、そこらは灰神樂で、一分許り疊の目もみね程黒くなつてゐる。  
ブツ／＼小言を云ひ乍ら、穂先の薙刀になつた箆でヤットの事、灰を掃清め、ドスン  
と團尻を下ろした所へ、ヒヨロ／＼になつて、一杯機嫌の鼻唄諸共、トク、テクの  
兩人がやつて來た。

トク「これは／＼、生宮様、お一人で嘸お淋しいこつてムいませう。ヤクの後を追つ  
かけて、生宮様がお駈出しになつたものですから、人馬の行通ふ雑踏の巷、貴女の

お身の上が險香だと思ひ、三人が手分を致しまして、そこら中を捜しました所、お  
行方が分らず、一層の事ヤクを取つ捉まへてお目にかけたいと思ひ、エルサレムの  
裏長屋迄捜して見ましたが、どう／＼幸か不幸か、姿を見失ひました。それから横  
町のカフェーに立寄り、ブドー酒をテクと二人引つけてゐますと、それは／＼天  
地轉倒と云はふか、地震ゴロ／＼雷ビカ／＼、いやもう、ドテライ、貴女のお身  
の上を取つて、大事件が突發して居りましたので、取る物も取敢ず、御弟子になつ  
た御奉公の初手柄として御報告に参りました」

お寅「それはどうも有難う、お前ならこそ報告に來て呉れたのだ、大方ブラバーサが暴  
力團でも使つて、此お寅を國へ追返さうとでも企んでゐるのぢやないか」

トク「イエ、滅相な、そんな小さい事ですかいな。貴女のお身の上にとつて、天變地

異これ位大きな災はムいますまい、なあテク、側から見ても、ムカつくぢやないか」

テク「本當に、腹が立つて、齒がギチ／＼いふたぢやないか、あのザマつたら、論にも杭にも掛らんわい。お寅さんが本當にお氣の毒だ」

お寅「コレ、序文許り並べて居らずに、短刀直入的に實地問題にかゝつて下さい、一休大事件とは何事だいな」

トング「へー、これ程大事な事を申上げるのですから、貴女はお喜びでせうが、一方の爲には大變な不利益です。そうすれば、貴女に喜ばれて、一方の方からは非常な怨恨を買ひ、暗の晩にでもなれば、うっかり外は歩けませぬわ。それだから、へ、、、一寸は容易に申上げたうても申上げられませぬ。なあテク、地獄の沙汰も〇〇だからなア」

いな

お寅「エー辛氣臭い、お金欲しいのだらう。お金ならお金と何故あつさり言はんのだいな」

トング「ハイ、仰に従ひ、あつさり申上げます。さうか前金として、二十圓程頂戴致したうムいます」

お寅「ヨシ／＼、サ、あらためて取つてお呉れ」

トング「其場に投出せば、二人はガキの様に引つつかみ、ヤニワにポケットへ捻込んで了ひトング「ヤ、有難う、流石はウラナイ教のお寅さん、底津岩根の大ミロクの生宮、日出神のお寅さん、ウラナイ教の大教主、誠に感じ入りました」

お寅「コレ／＼、そんな事聞かうと思つて、お金を出したのでない。大事件の秘密を早

く聞かして下さい」

トク 「ハイ、これからが正念場です。さうか吃驚せないように、胴をすねて居つて下さいや。エー、實の所は横町のカフェー迄一杯呑みに行きました所、裏の離れに男が喋々喃々ど、甘つたるい口で囁いたり、頬べたを抓つたり、金切聲を出して、意茶ついてる者があるぢやありませんか」

お寅 「成程、そら大方ブラバーサミマリヤの風俗壞亂組だらうがな。そんな事がナニ妾に對して大事件だろ、併し乍らヨウ報告して下さつた。之から彼奴等を力一杯攻撃して、更び世に立てない様、社會的に葬つてやる積だから、そら可い材料だ」

トク 「もし、お寅さん、そう早取して貰うと、二の句がつけませぬがな。オイ、テク

お前まへ之これから性念場しやうねんばを些ちつと許ゆるり申まを上げて呉くれれ。お前まへ廿兩貫にじふりやうくわんふた豆加まめがもあるからの」

テク 「お寅さん、そんな氣樂きらくな事ことですかいな、お前まへさんの寢ねても醒さめても忘わすれない、最愛あいのレコエあやめのお花はなさんが、それはく目めだるい事ことをやつてましたよ。私わたしが貴女あなただつたら、あの盛さかにはして置おきませんな。生首なまびきを引ひ抜ぬいて烏くわにこつかしてやらねば虫むしが癒いませぬがな」

之これを聞きくより、お寅おとらは電氣でんきにでも打うたれた如ごとく打驚うたおそき、暫しばしは口くちを尖とがらし、目めを斜ひいて言葉ことばも出でなかつたが、稍や暫しば時ときして、

お寅 「テ、テクさん、ト、トクさん、そら本當ほんたうかいな。本當ほんたうとあれば、ジットしては居をられない、お花はなの奴やつ、本當ほんたうにバカにしてる」

と早くも捻鉢ねはち巻まきをなし、赤袴あかかきをかけよこにする。

トシク「そら、マ、待つて下さい、そう慌て、も、話が分りませぬ、どうく二人は夫婦約束を致しました。そして祝言の盃もやり直したといふことですよ」

お寅「ナ、ナアニ、シユく祝言の盃、そして又ド、何處の内、ソ、そんな事を、ヤ、やつてゐるのだい」

トシク「横町のカフェーの奥座敷ですがな、併し乍らトシクが言つたとは、云つて貰へませんで、あとが恐ろしくムいますからな」

お寅「コリヤ、トシク、テク、お前も妾の家來に成つたのぢやないか、妾の爲には何でも聞くだろ、妾が踏込んで生首引抜くのも易い事だが、そんな亂暴な事すると、日出神の估券にか、はる。妾はこゝで辛抱するから、お前代りにお花の生首引抜いてヨルダン川へ投込んで下さい。そうすりや、何ほでもお金は上げるからな」

トシク「何程お金に成りましても、そんなこたア私に出来ませぬワ。暴力團取締令が出て居りますので、二人寄つても、直にスパイが後を追つかける時節ですもの。そんなこたア、御本人直接に決行されたが可いでせう。刑務所へ放り込まれて臭い飯くはされても約まりませぬからな、それとも一萬兩下さらばやつてみても宜しい」

お寅「エーく腑甲斐のない、何奴も此奴もガラクタ許りだな。守宮別さんは決してそんな無情な人ぢやない。酒に酔ふと、いろくの事を仰有るが、正直な親切な、誠生粋な大廣木正宗さんの生宮だ、スレッカラシのお花の奴、どうく地金を放り出し、男を喰はへて、ヌッケリコロ夫婦氣取で、そんな所へ行て酒をくらうて居やがるのだらう。エーまじろしい、暴力團取締が何だ。日の出神の生宮がお花位に敗北を取つてさうなるものか」

肩毛は逆立ち目は血走り鉢巻をしたまゝ、襷をかけたまゝ、後先の考へも無く腹立  
 紛れに飛出した。トンク、テクの兩人は、「コラ一大事」とお寅の後を見わかぐれに  
 付いて行くと、十字街頭を微酔機嫌で守宮別がお花の手を引いてヒョロリ／＼とやつ  
 て来るのに出會した。お寅はアッと言つたきり、其場に悶絶して了つた、守宮別、お  
 花は掛り合になつては一大事と、素知らぬ顔し乍ら、橄欖山目がけて逃げてゆく。

(大正一四、六、三〇、舊八、一九、於由良秋田別荘、松村眞澄録)

第八章 擬

俠

心 (一八二四)

君の仁政はきこにある	朝から晩までタラ／＼と
汗水しほつて金儲け	しやうと思つて人並に
苦しみ悶々汗膏	殆き盡きた此體
膏のやうに絞られて	身体頓に骨立し
悲鳴をあぐるその中に	君と僕との人生は
深く潜んでゐるのだらう	思へよ思へ友の君
資本主義なる世の中は	キャピタリズムを唱ふれば
大罪惡の酵母だよ	殺人強盜強女や

擬 俠 心

詐僞に窃盜脅喝や

まだあるく澤山に

これもヤツバリ我々が

人生に處する餘儀なき手段であるだらう

このやうな事になつたのも

キヤビタリズムの賜だ

不勞所得者の賜だ

ガンヂガラミに縛つてゐる

その方法は警察だ

裁判所だ刑務所だ

も一つひびいのは絞首臺

おまけに憲兵だ軍隊だ

まだく無數に手段ある

蜘蛛の巣よりも巧妙に

鋼鐵よりも頑強に

無數の吸盤で我々の

生血を吸ふたり膏をば

ねぶつて喰ふ資本主義

制度の此世にある限り

君等も我等も助からぬ

抑人生のおき所が

悪かつた爲に我々は

膚は寒く腹は餓に

終にや縛られ殺される

何とかせねばならうまい

惡逆無道の此制度

打てや、こらせやブル階級

振へよ、起てやプロレタリア

立つべき時は今なるぞ

政治宗教法律や

倫理や修身何になる

我等は命を的にかけ

子孫のために惡制度

破壊せなくちや人生の

大本分が盡せない

打てや懲せやブルジョアを

と四五人の労働者が赤い旗を立て、橄欖山麓を歩んで来る。待ち構へて居た數名の警官は有無を云はせず一人も残らずフン縛つて了つた。



警官「コリヤ、その方は今何を歌つてゐた。不穩と認めるから捕縛したのだ。調べる事があるからエルサレム署迄キリ／＼歩め」  
その中の一人は盛に首を振り乍ら、

「オイ、ボリス、馬鹿にすな、俺等はもとより主義の爲めに生命を捨て、ゐるものだから、拘引位は此の茶も思つてゐないが然し乍ら、人民の聲を聞いて省たがよからうぞ。貴様は何だ、僅かな目くされ金を貰ひやがつて人民の怨府になり、時代錯誤の張本人の部下となつて、その日を暮すとは實に憐れつほいものだのう。俺は、こゝろ見ても世界で有名なトロッキーだ。さうだ、今此際俺の云ふ事を聞いて一同の縛を解くか、それとも時代に目醒めずして俺等を拘引するか。忽ち汝が頭上に炎の來るは電光石火よりも速かだぞ。此聖地には俺の部下が殆ど七八分ある筈だ。そ

れだから何程法律を喧しく云つても、宗教を叫んでも駄目だ。覺醒するなら今だがさうだ、返答を聞かう。それまでは一寸だつて我々は動かないぞ」

警官は互に顔を見合せ、トロッキーも聞いて、稍恐怖心に懸られてゐる。警官は各耳に口を寄せ善後策について協議をやつてゐる。そこへ守宮別、お花の兩人がホロ酔機嫌で現はれ來り、

守宮「オ、これは／＼誰かと思へば警官、こなたでゐるか。さても／＼澤山な得物がムつたものだな。エー、併し乍ら、御中言で恐れ入りますが、一寸、私の言ふ事も聞いて下さい。永くお暇はこりません。何のために労働者をお縛りになつたのですか、労働者は抑も國家生産機關の基礎でゐますよ」

トロッキー「イヤ、お前さんが噂に高い日出島の守宮別さんだな、そして、そこにゐる

のは有名なお寅さんかい」

守宮「イヤ、お寅さんは、一寸様子があつて此頃靈城に神界のため立籠もつてゐられま  
すよ。私はお寅さんのお弟子と、……エー……、神界の御用でお山に詣る途中です  
が、貴方等が縛られざるのを見て、さうも、黙過する譯にも行かず、今警官とかけ  
あつてゐる處ですよ。又何のために、こんな目にお會ひになつたのですか」

トロッキー「今日は全國の農民が労働を祝福すると共に、暴逆極まる資本主義の搾取と壓  
制に對し、一齊に抗議を投げつけるため、世界の無産階級のために友情を示し、又  
我々團體の決意と團結の一層強固ならん事を誓ふために、示威運動を全國一齊に行  
ふ日です。農民組合員は一人も洩れ落ちなく、婦人も少年も、これに加はつて我々の  
無産階級團體を作るための運動最中、わからずやのボリスに引か、つたのですよ。

警官が何と云ふか知りませんが一同に農民歌を歌はせますから、それを聞いて農民  
の苦境をお覺り下さい」

「農民歌初め」と號令するや縛られた六人を初め、その附近に立つて居た人々も口  
を揃へて歌ひ出した。警官は呆氣にまられて黙つて聞いてゐる。

「農に生れて農に生き  
土を耕し土に死す

瘦たる土の香りにも  
汗と涙に生きんとす

我生活の悲愴さは  
ブルジョア階級の夢にだに

感知し得ざる悲惨さよ  
ア、我生命に力あれ

我運動に力あれ

○

春幾度か廻れども

富みおごれるは農民の

我々老若男女等が

汗と膏の賜物ぞ

汗とあぶらを盃に

汲んでは花にたわむれつ

秋の月をば慰めに

酒汲み交すブル階級

寒く餓わたる同胞を

蔑み笑ひ鞭てり

鬼が大蛇か狼か

悪魔のはゞる此世界

立替せずにおくべきか

我等が生命に力あれ

我等が運動に力あれ

たぎるが如き小山田の

眞夏眞晝も汝々として

瀧なす汗をしほるのも

來らん秋の入百穂の

稲の實のりの肥料ぞと

苦熱を凌ぎ草これば

高樓絃歌にさんざめく

我等は命を的として

此悪風を根絶し

我等の未來を救ふべし

未來は我等のものなるぞ

我活動に力あれ

我生命に力あれ

曙白く星寒く

刃の如き秋の風

山野の草は枯れ盡し

地上一面霜をおき

鎌を握れる此手先

霜ふみしめし足の先

擬 俠 心

罇凍傷に血走れど

惣はん暇さへなかりしが

その收穫は大部分

地主の倉に收まりて

淋しく泣ける寒狐

住む家さへも壁は落ち

見るも悲惨な光景ぞ

あ、人生はかくの如

悲惨で一生を通すのか

否々決してさうでない

天の與へし田種物

働くもの、所有ぞや

不勞所得者の権力が

どこに一點あるものか

我等の運動に力あれ

未來は我等のものなるぞ。

○

汗と涙と血を捧げ

地上に畫かく藝術の

誇りも空しく夢と消ね

汗と涙に汚れたる

我等が辛苦の結晶は

奢侈逸樂の犠牲となり

飢と寒さに子等は泣く

あ、この慘狀をいかにして

いつ迄看過出來やうか

我等の命に力あれ

未來は我等のものなるぞ。

○

咄何者の奸策ぞ

正義の刃に血は煙

自由の劍をこりて立つ

雄々しき勇士といたわしき

妻子の上に迫害の

魔の手は下れり爪先を

敏鎌の如く研すまし

我等が大切の玉の緒を

斬らんと企むブル階級  
 この世この儘置いたなら  
 子孫断絶するだらう  
 我等の運動に力あれ

倒さにならぬ我々は  
 彼等の爲に亡ほされ  
 我等の生命に力あれ  
 未來は我等のものなるぞ。

壁落ち軒は傾け  
 爲には自由の誇りあり  
 抱く眞理に光あり  
 反逆すべく起てるなり  
 打てよ懲せよブル階級。

五尺の體を休養する  
 我等貧しく疲れしも  
 永き搾取と壓制に  
 未來は我等のものなるぞ

君よ見ざるや農民を  
 君聞かざるや農民を  
 あ、今我等起たずんば  
 起てよ振へよ怒れよ狂へ

全土を覆ひし團結を  
 來れよ友よと呼ぶ聲を  
 混沌の世を如何にせん  
 未來は我等のものなるぞ

トロツキー「先づ我々の主義は此通りでいます、永らくの間、農民は地主資本家のため、生血を絞られ、瘦衰して参りました。その爲國家の大本たるべき農民は身体骨立し満足な働きも出来ないのです。これに反して不勞所得者たるブル階級は豚の如く、象の如く肥太つて居ります。これも皆貧民の生血を搾取した結果です。神の子と生れたる我々人間が、さうして此慘狀を眞面目に見てゐる事が出来ませうか。如

何に宗教が倫理を説くとも、天國を説くとも、法律が入釜しく取締つても、パンなくして人は世に生活する事は出来ずまい。そのパンの大部分を搾取する鬼や大蛇の階級を蕩滅し、平等愛の世界に作り上げるのは、我々志士たるもの、天賦ではありませんか。無論宗教は精神的に人類を救ふでせうが、焦眉の急なる衣食住の問題を閑却しては、宗教の權威も有難味もムいますまい。そんな手ぬるい手段では、今日の世を救ふ事は駄目だと思ひます」

守宮「成程尤も千萬だ、僕は大量成を致します。もし警官の、さうか此憐れな労働者を解放して下さい。その代り拙者が代人となり括られませう」

お花「これ、守宮別さん、何と云ふ事を、お前さんは仰有るのだい。人の罪迄引受ける云ふ事が、何處にありますか。私をさうして下さるおつもりですか」

守宮「ナザレのイエス、キリストでさへも世界萬民のため十字架にかゝられたぢやないか。俺がいつも酒を飲んで浮世を三分五厘で暮してゐるのも、社會人類のため命を投げ出してゐるからだ。ブラバースやお寅さんの様に口ばかり云つて居つても誠が無けりや駄目だ。俺は之から無産階級者の代表となつて處刑を受けるつもりだ」

お花「それも、さうでムいませうが、これ守宮別さん、お前さんが、そんな處へ行つた後は、妾はさうするのですか」

守宮「お前は、精出してお酒の差入をするのだ」

お花「酒なんか差入は出来ずまい」

守宮「出来いでかい。今の役人は皆飢る腹をか、へてブリキを佩つて威張つてゐるから、ソツと金さへやれや何でも、云ふ事を聞くよ」

かゝる所へ俄に四邊騒々しく數百人の、暴漢が現はれて警官を十重二十重にとりま  
 き袋叩きにして了つた。トロッキエ名乗る男、及び縛されて居た連中は、この隙に  
 各細目をきき凱歌をあけ何處ともなく消れて了つた。守宮別お花は得意になり、鼻  
 歌を歌ひ乍ら橄欖山上目がけて登り行くのであつた。

(大正一四・八、一九・舊六、三〇・於丹後由良・北村隆光録)

瑞 月

瑞みたま月の光をながむれば

真如の空に玉をかざれる

第九章 狂

怪 戦 (一八一五)

お寅 「有爲轉變は世の習ひ

變る浮世の有様は

寝ても醒めても夢現

頭の先から爪の端

惚てムつたお前さん

私とこんな仲となり

此聖場の神様も

何程神ちや佛ちやと

天が地となり地は天と

私と貴方の事だらう

日の出の神の生宮に

身も魂も打こんで

さうした風の吹廻しか

二世を契つた夫婦連れ

嘸や御嘉納なさるだらう

高尚な事を云つたとて

人は肉体ある限り

湧いて出て来る性の慾

満たす事をば知らずして

可惜月日を送るのは

天の興へた快樂を

蹂躪するに云ふものだ

ラブイズ、ベストをふり廻し

自由自在に性の慾

遂げた處で神様の

干涉すべき理由ない

あゝ面白やたのもしや

こんな尊き歡樂を

お寅婆アさんにだまされて

龍宮海の乙姫の

身魂ちや改心せにやならぬ

もしも男に觸つたら

八萬劫の罪咎が

一度に現はれ日に三度

極寒極暑の苦しみを

受けるに甘く騙かして

私を十年釣つて呉れた

ほんに思へば思ふ程

妾は何と云ふ馬鹿だらう

戀に醒めた此お花

もはや弓でも鐵砲でも

びくとも動かぬ磐石心

固めた上はお前さん

浮氣心を拂拭し

きこく迄も借老の

契を結んで下されや

命も寶もなげ捨て、

お前に任した此身体

焼いて喰はふと煮て喰はふと

決して不足は云ひませぬ

さはさりながら旦那さん

貴方は本當に水くさい

二世を契つた女房の

ある身で居ながらうかくと

義侠心をば放り出して

トロッキーさんの身替りに



警察署の門戸をば

潜つてやらうと仰有つた

義侠も仁侠もよいけれど

そんな無益な犠牲をば

拂つて居つては世の中に

生て行く事あ出来ませぬ

これ許りは旦那さん

私が可愛と思ふなら

思ひこまつて下されや

人氣の悪い世の中は

何時騒動が起るやら

分つたものではありません

其度毎に犠牲者ぞ

なつて行かれちや此お花

きうして立つ瀬がありません

軍人さんを夫にもち

喜び勇む間も非ず

こんな苦しい思ひをば

させられやうとは知らなんだ

大和魂か知らねども

今後は止めて下しやんせ

可愛女房が手を合せ

涙流して頼むぞや

あ、惟神々々

ウラナイ教の大御神

千變萬化に移動する

夫の心を喰ひ止めて

私の身魂にピッタリ

釘鏡を打つたやうに

離れないよに願ひます

これが一生のお願ひだ

縁と云ふもの妙なもの

海外萬里の此國で

何とも思ふて居なかつた

守宮別さんが戀しうなり

足許さへも見わぬ迄

戀の暗路に迷ひました

私は心が狂うたのか

我々我身が怪しうなり

合點行かぬよになりました

ほんに女と云ふものは  
 男の一嘸一笑が  
 苦しい思ひがして來ます  
 戴く身ながら村肝の  
 胸はごき／＼息つまり  
 こんな心になつたのも  
 廣い天地の其間に  
 私の命ぞ力ぞや  
 さつぱり此世は地獄ぞや  
 好きな貴方と諸共に  
 男にかけたら脆いもの  
 胸に五寸釘打つやうに  
 頭に霜をちら／＼と  
 心は元の二八空  
 耻も外聞も何のその  
 罪なお前がある故だ  
 たつた一人のお前さん  
 もしもお前が死んだなら  
 地獄の底の底迄も  
 落ちて行くなら厭やせぬ

これ程思ふて居る私を  
 見捨てられたる其時は  
 まだ／＼おろか鬼となり  
 引きぬきますよ旦那さん  
 あゝ頼もしやく／＼  
 貴き神のあれませる  
 三四十年も若返り  
 詣る心は天國の  
 百のエンゼルに導かれ  
 あゝ／＼長生きすればこそ  
 すけなう見捨て、下さるな  
 地震 雷火の雨も  
 大蛇となりて素首を  
 先に氣をつけおきますぞ  
 處は世界の中心地  
 橄欖山の聖場で  
 喰しき御山を手を曳いて  
 花咲き匂ふ樂園を  
 登つて行くやうな心地ぞや  
 年を取つてから戀愛の

本當のく味ひが

分つて来たのだ有難い

日の出の神や大ミロク

生宮さんの前だこて

こんな楽しい潔い

思を今迄せなかつた

ほんに貴方は救世主

天津御國のエンゼルよ

あ、惟神々々

御靈幸倍まませよ

ホ、、、、これ守宮別の旦那さん。私の思ひを汲み取つて下さつたら、餘りを憎ふはムいますまい。さうかイターナルに愛を注いで下さいな。道草を喰つたり横を向ひたりしちや嫌ひですよ。私云ふ立派な奥さんがあるのに元が軍人氣質だから要らざる義侠心を出し、暴悪無頼のトロッキーなきの身替りにアタ阿呆らしい警察へ縛られ行くなんて、そんな事は止めて下されや。何程世の中を救ひ云つたこて

キリストさんのやうに磔刑になつちやたまりませんよ」

守宮

「お前と一緒に磔刑になつたらよいぢやないか、萬劫末代名が残るぞよ。お前と

お寅さんと口癖のやうに、世界の萬民を助けたら萬劫末代結構な名が残るといつて居たぢやないか。昔キリストが十字架にかつて萬民の罪を贖つたと云ふこのエルサレムで世界の犠牲者となり末代の名を残すのも人間としては痛快事だよ。なアお花さん」

お花

「嫌ですよ、お花さんなんて他人らしいそんなお言葉おいて下さい、何程名が残ると云つたつて命が無くなつて了へば肉体的歡樂を味はふ事が出来んじやありませんか」

守宮

「死んで未來で仲よく添ふたら好いぢやないか、さうすれやお前もお寅さんに取り

かへされる心配も要らず、宇宙第一の安全地帯だよ。俺だつてトロッキーなきの身替りになるやうな馬鹿ぢやないが、一寸お前に實の處は……義侠心の強い男だなア……このやうに思はし度いので芝居をやつて見たのだ。其上澤山の農民團體や労働團體が傍にごろついて居たもんだから、日の出島の守宮別と云ふ男は義侠心に富んだ男だ、彼れこそ眞當の救世主だ。世界中に名を廣めやうと思つた私の策略だよ。兎角人間は廣く名を知られないと仕事が出来ないからなア。あのウズンバラ、チャンダーだつて實際に交際あつて見ればコンマ以下の人間だ。俺から見れば小指の端にも足りないやうな小人物だ。そいつがふとした事から事件を捲き起し世界中に名が響いたもんだから、世界の阿呆共がキリストの再來だ、ミロクの出現だ、メシヤだ、なき、擔ぐやうになつたのだ。賣名策には労働者の中に入つて一寸味をやるのが一番

奥の手だよ、ハ、ハ、ハ、

お花「ホ、ハ、ハ、何さまア抜け目の無いお方だ事。それ丈の智慧がある癖に今迄どうしてお寅さんのやうな、没分曉漢に食ひついて入らつしやつたのですか」

守宮「お寅さんは變性男子の系統ぢやないか、脱線だらけの分らない事を喋り立てて居ても、何と云ふても系統だから、三五教の没分曉漢連がコソ／＼とひつつきに來よる。そいつを利用して、つまり要するに三五教の轉覆を企て、變性女子の地位に取つて代らうと云ふ大野心を持つて居たからだ」

お花「何さまア人は見かけによらんものだ事、夢か現の守宮別さんと播陽さんでさへ云つて居られた位だから、酒さへ呑ましておけばい、男だと思つて居たに、聞けば聞く程頼もしい何と云ふ立派な男だらう。併しそれも無理もない、世界の事にかけたら

酸も甘いも辛いも悟りきつた蹴爪の生れた、コケッコウか、尾が二つに分れた山猫のやうなアヤメのお花を蕩かす云ふ腕があるのだもの、ホ、ホ、ホ、油断も隙もならない主人だわ。一つ守宮別さん、否旦那さん貴方の得意な鈴虫のやうな聲で詩吟でもやつて下さいな。私ばかりに歌はしてあまり平衡が取れませんわ」

守宮

「よし／＼お望みとあれば詩吟でも何でもやらう」

と銅羅聲を張り上げ大口をあけ

月落ち鳥啼いて霜天に満つ

曉に見る千兵の大牙を擁するを…… ベスト……

お花

「これ旦那さん、そんな奮めかしい詩吟ならもう止めて下さい。どうか私の事を諒つて貰ひたいのですがなア」

守宮

「よし／＼それちや新派で一つやつて見よう。齒の浮くやうな飽つほい歌だよ。オホン。

天を背景となし

地を舞臺となし

雲の袖をふるつて

大宇宙に活躍す

あ、我人と生れて人に非ず

さりこて獸にも非ず

又神でも無ければ佛にも非ず

廣い宇宙に只一點の肉塊として

忽然として住めるのみ

あゝ天の時今や到りて

世界の中心地點

日の出の島の又中心

浪花の遊里に初聲をあけたまひし

あやめの君と懇親を結ぶ

我現世に生誕して初めての歡喜を知る

醫者と南瓜はヒネたのがよい

色は年増が良め刺す

あゝ何たる幸福ぞや

お寅の如きは物の數ならず

其面貌はアトラスの如く

其贅肉は搗臼の如し

アヤメの君とお寅婆を比較すれば

天空に輝く月光菩薩と

地中に潜む泥龜の如し

加ふるにお寅の懷中には

僅かに千金を剩すのみ

黄金萬能の現世に於て

萬金を懷中する

アヤメの君こそは

富においても最大優者なり

この夫人にしてこの金あり

この夫人にしてこの夫あり

俗に所謂鬼に金棒とは

這般の消息を物語るもの

あ、愉快なりカンランの山

夫となり妻となつて此艶姿を天地の萬物に觀覽せしむ

宇宙の幸福を我と汝と獨占して

生乍ら幸福の神となり

萬劫末代生通しの仙術を學んで

天地と共に悠久に生んとす

あ、たのもしきかな

カンランの夕

月は皎々として五色の雲の階段を昇り

星は燦爛として金銀の光を放つ

天清く地又清し

我清く汝又清し

半日の清遊實に心膽を洗ふの思ひあり

喝。

お花 「あ、吃驚しましたよ、狸のやうな口あけて、喝なんて何ですか。喰ひつかれるかと思ひましたよ」

守宮 「あまりお前が可愛いで頭から、嘔ぶつてやらうと思つたのだ、アハ、」

お花 「オホ、、、あのまア旦那様のほごのよい事哩のう。その聲で蟻喰ふか杜鵑式だから一寸も油断は出来ないわ」

守宮 「おいお花。もう黙つて行かう、さうやら、あの木蔭に人が居るやうだ、些と許り見つともないからなア。お前は二三間離れてついて来て呉れ。さうして人の居る所で旦那さんなんて云つて貰つちや困るよ」

お花 「ハイ、旦那さんつて今日限り申しません。よう氣の變るお方ですな」と早や格氣の角を生して居る。

守宮別は小聲で

守宮 「あ、女子と小人は養ひ難しとは能くいつたものだな。柔しく云つたら自惚る、強く云へば吠わる、殺せば化けて出ると云ふ魔物だからなア、アアア」

お花は小聲でハッキリわからぬアアアの聲を聞き、こいつは又例の境界線ではないかと心配のあまりサット顔色變り墓蛙の鳴き損ねたやうな面をさらして居る。

路傍の五六間先の木の下から瓦をぶちやけたやうな笑ひ聲が聞えて来る。

(大正一四、八、二〇、舊七、一、於由良、加藤明子録)



## 第一〇章 拘

淫 (一八二六)

橄欖山の坂路の木陰に四五人のドルーズ人や、アラブや、猶太人が労働服を着た盛面自相に雑談に耽つてゐる。

バルガン 「オイ、ガクシー、汝は此間の戦争に行つたといふ話だが、金鶏勳章でも貰つたのか、花々しき功名手柄をして返るなんて云ひよつて、近所合壁に送られ、大變な勢であつたが、凱旋祝も根つから聞いた事もなし、いつの間にか吾々労働者仲間には舞戻つて来よつたが、一体戦ひの状況は何うなつたのぢやい」

ガクシー 「ドルーズ族のあの叛亂によつて佛軍から雇はれ、ジエール、ドルーズの都、ジエールに進軍した時、ドルーズ族の勢猖獗にして、佛軍は手もなく打破られ、

みじめな態で四方八方へ、一時は散亂して了つたのだ。其時俺は軍夫として、實の所は後の方に輸送をやつてゐたが、大砲の弾が、間近にドン／＼落ちて来るので、何奴も此奴も腰を抜かし、肝腎の軍夫が、兵隊さんに擔架に乗せられて運ばれるといふ惨めな態だつた」

バルガン 「あれ文軍器の整うたフランスの精兵が、なぜ又暴民團體たるドルーズ族に脆くも打破られたのだ。チミバランスがとれんぢやないか」

ガクシー 「そこが所謂戦争は水物といふのだ。兵数の多い方が勝つ共、武器の整頓した方が勝つ共、又は武器の調はない兵数の少ない方が勝つ共、それは時の運だから分らないワ。何しろドルーズ族は一兵卒に至る迄地理には精通して居る上、人の和を得てる上、あれ丈の人氣だつたから、其虚勢丈でも勝たんならん道理だ。僅か

二萬位の叛亂軍に五万のフランス兵が、飛行機も大砲も輜重車も、何もかも打ちやつて、命カラ／＼敗北して了ひ、ドルーズは敵の武器を應用して、あく迄も頑強に戦ひを續けるものだから、佛軍はとう／＼ジューダの首都を占領されて了つたんだい。本當に強い者の弱い、弱い者の強い時節になつたものだ」

バルガン 「そうするに、俺達も社會の弱者として、地平線下に汗にひたつて蠢動してゐるのだが、何時か又頭をあげる時があるだらうかな」

ガクシー 「あらいでかい、有爲轉變の世の中だ。いつ迄も世は持切にはさせんと、きつかの神さんもいつてゐる相だから、未來は必ず吾々プロレタリアの天下だ。まあ／＼クヨ／＼思はずに、暫く辛抱するんだな、今日も今日とて、エルサレムの町を温順う歩いてゐると、俺の風体が醜いとか怪しいとか云ひやがつて、スパイの奴、何處

迄も尾行してうせるのだ。そして吐す事にや……君はきつから來た、そして何處へ行く。何の用だ。年は幾つだ。姓名は何といふ……なき、三文にもならぬおせつかいを遊ばすんだから、道も安心して歩けやしないワ。丸で上に立つてゐる役人共は子供につ、かれた蜂の巢の番兵蜂の様な神經過敏になつてゐやがるのだからのう」

バルガン 「本當に約らぬ世の中だの、何時迄も此儘にして置こうものなら、世界はメチャ／＼になるだらうよ。さうしても此調子では十年た、ぬ内に大革命が起るだらうと思つてゐるのだ」

ガクシー 「そらさうだ、生活難や就職難の叫びがこれ丈喧しくなつて居るのだもの。ブル階級や役人共も可いかげんに目を醒ましやがらんこ、たつた今、俺達と地位轉倒して彼奴等は惨めな態になるだらうよ。俺や其世が來る迄は死んでも死なれないの

だ。先祖代々から彼奴等に虐げられて来たもの、祖先の耻を雪ぐのは、吾々子孫たる者の義務だからなア。最前も此山麓でトロッキーとかいふ男が、労働團や農民團を集めて過激な演説をやつて居つたが、聴いてみれば一から十迄御尤も至極だ併し乍ら、あんな事を聞いて居らうものなら、蜘蛛の巣をはつた如き警察の網にかかつて、厭應なしに、暗い所へブチ込まれちや大變だと思ひ、君子は危きに近付かずといふ筆法で、こゝ迄スタ／＼やつて来りや、君たち御連中の御集會、屹度今頃

にや、何か亂痴氣騒ぎが始まつてるかも知れないよ」

バルガン「誰でも可いから、確りした犠牲者が現はれると可いんだがなア。そうすりや俺達ア、漁夫の利を占て安樂に暮せるんだけれさ。何奴も此奴も小ざかしい人間許りで、自分の身命を賭して矢面に立つといふ大馬鹿が出て来んで、サッパリ駄目

だ。かういふ時にや、さうしても大馬鹿でなけりや、世界の改造が出来ないから  
のう」

ガクシー「そらそうだ。ドルーズ族の會長カンバスでさへも、始めは大變な勢で矢面に立ち、二万の民衆に武器を携帯させ、フランス軍と勇敢に戦ひ、一時は大勝利を博しよつたが、いよく／＼茲といふ所で、俄に怖氣立ち、安全地帯に身を逃れよつたものだから、全軍の士氣頓に阻喪し、折角取つた首都も再び佛軍の手に歸し、重立つた者は何れも縛につき、ドルーズ族へは莫大な賠償金を云ひ付けられ、ヤツトの事で、カンバスの哀願に仍つて、大赦令を布かれ、一件落着するはしたものの、ドルーズは酷い破目に陥つたものだ。徹底的にさこ迄も犠牲になるといふ奴さへあれば、あんな事は無いのだけれさな、何と云つても馬合の衆だから、バラモン

には最後迄敵する事は出来やしないワ。之を思ふと吾々プロレタリアの前途も暗澹たるものだないか。腹いせまぎれに、夜中密かに役所の門に小便を庇りかけたり、糞を垂れた位では何にも効はないし、大頭の一疋や二疋爆弾でやつてみた所で、飯の上の蠅を追ふようなものだ。先ぐり／＼次から次へに、だん／＼悪い奴が現はれて、益々吾々に對して厳しい法律を發布したり、三人寄つて話をしても拘引するといふ、石で手をつめたような目に合はすのだから、矢張り、弱い者の弱い強い者の強い時節だ……云つても仕方がない。強い者の弱い、弱い者の強い時節は萬年に一度位しか、廻つて来るものぢやない、何だか日出島からブラバースかいかいふ宣傳使がやつて来て、今に救世主が現はれるとか、神が表に現はれて、善と惡とを立別けるとか、下が上になり、上が下になるとか、ほざいてゐるようだが、これも一種の

宗教廣めの廣告に過ぎないだらう。何程宗教が愛を説いても、パンを與へてくれなくちや、吾々は生存權を保持する事が出来ないのだからなア。……ヤ、何だか山下に當つて、騒がしい聲がし出したぞ。トロッキーの奴、さうやら警官隊と格闘を始めたらしいワイ。ソロ／＼降りて壯快な戦闘振を見物せうぢやないか。獅子の子か何ぞのように、かう木かげに潜伏して、世を呪ひ、悲鳴をあけて居つても、一文の所得もなし、愉快もないからのう」

バルガン 「おけ／＼、こんな時に出るものぢやない。側枝をくつて打ち込まれちや大變だ、先づ嵐の後の静けさを見聞するのが、處世上伶俐なやり方だ。それよりも腹いせに何か面白い話をせうぢやないか」

ガクシー 「俺達に面白い話があつて堪らうかい、朝から晩迄ブル階級に酷きつかはれ、

僅な賃錢を恵まれて、孜孜して僅に露命をつないでる悲惨な境遇にあつては、到底面白味も分らず、苦しい事許りだ。俺が五六年前の事だつたが、仕方がないで、人力車夫をやつてゐるに、家主の奴、人並よりも高い店賃を取り乍ら、從僕か何かのようにガクシー／＼と口ぎたなく呼つけにしがつて、雪隠の掃除迄いひ付けくさる。却腹でたまらないが、怒れば家を出て行けと云ひやがるし、裏店の隅々迄貧民でつまつてゐる此際、此處を放り出されたが最後、忽ち親子が野宿をせなくちやならず、仕方がないので辛抱して居ると、しまひの果にや、おれの嬪の名を呼捨にさらすのだ。けつたいの悪いの胸糞が悪いのつて、胸が張裂ける様だつた、そこで俺は道路の端に餓れて、死にかけてる野良犬を一疋拾つて来て、そいつに家主の名を付け、大きな聲で、……コラ權州々々……と口汚なく喚き立て、其度毎に拳

骨で頭を、大家の權州だと思ひ、撲りつけてやつた。其時や、チツと許り痛快だつたが、野良犬の奴、大變な大喰をしよるので女房子供の腮が干上り相になつた。此奴にや一つ俺も面くらはざるを得なかつたが、それでも人間は意地だ。こんな所で屁古たれちや、男が立たないに、要らぬ所へ力瘤をいれ、働いても／＼、皆犬にしてやられる。苦み果て、る矢先へ、大家の權州奴、大きな犬を俄に三疋も飼ひやがつて、其奴に俺の名と女房の名と俵の名を付けやがつて、家内中が寄つて集つて呼つけにしがるので、俺もこんな所で屁古垂れちや仕方がない。もつと犬を集めて大家の家内中の名をつけて、呼つけにしてやらうと思つたが、能く／＼考へてみれば、大きな家に三夫婦もけつかつて、子や孫總計二十八匹も居やがるものだからどう／＼根負して旗をまき、矛を収めて、一時ジュールの都迄逃出して了つたのだ

本當に仕方のないものだよ」

バルガン「ハ、、、、そら失敗だつたね。そうだから、昔の賢人とか君子とかいふ阿呆者が、長い者にまかれよ……とか、衆寡敵せず……とか、ほざきよつたのだ、何程面白い話が無いといつても、失敗許りぢやあるまい。お前だつて、永い事人力屋をして居れば、些と位、ボロい事もあつただらう」

ガクシー「いやもう失敗だらけだ。エー、コーツと、何時やらの夕まぐれだつたッジエールの都の郊外を歩いてると、大きなデーツブリと太つた、布袋のような男がやつて來よつて、俺は萬民に福を與へる福の神だから、一時間許り乗せて呉れないか、……と云ひよつたので、お金は幾ら下さるか……といへば、お前に金をやつては福が退ぬ。俺さへ乗せておけば、屹度汝の内は明日から繁昌する……と云ひよつたので、此奴

ア願うてもない事だ。一時間許り無料働しても福はぬ。八卦みて貰つても三十錢五十錢は取られるのだ……と思ひ、クソ重たい、太い福の神を乗せて、町中を右へ左へウロつきまはつた所、モウ之で可いと言ひよつたので棍棒下ろしよると、一寸便所へ行つて來ると吐しよつてなア。便所へ入ると姿が見えなくなつて了つたので、それから俺も便が催したので便所へ入り、澤山の雪隠の戸を開けて、一々點檢してみたが、影も形もない。此奴アいよ／＼福の神だ、姿が消えたのだ。キツと明日から福があるに違ひないと、吾家へ歸り、車をしまはうとするど、そこへ財布が残つてゐる。下けてみると中々重い。ヤ此奴アしめた。いかにも福の神様だつたわい。有難う頂戴致しますと、五六遍頭の上へ捧げ、神棚へまつり、鹽をふつて、其處邊中清め、開けて見た所、大枚百兩の丸金が目を剝いてけつかる。コリヤ、祝をせに

やなるまいと、俵引友達や近所合壁を集めて、其中の金を三十圓許りはり込んだ積りで、百圓の金を料理屋に見せつけて置き、仕出しをさして、一生懸命に福の神さんを讚美し、呑めや唄への大散財をやつて居ると、昨夜の福の神奴、ボリスと共にやつて来やがつて、棚の上にある財布に目をつけ、……これは昨夜俵の上で忘れて置いた金だどぬかし、有難うとも御苦労とも吐さず、ボリスの奴おまけに、拾得物の隠匿罪でもあるような面して、睨めつけて歸つて了ひやがつた。怪体が悪いの悪くないのつて、其時丈は女房にも申譯立たず、穴でもあれば入りたい様な気がしたよ。それから料理屋の奴、三十圓の催促に毎日日々やつて来やがる。され丈働いたつて、三十圓はおろか三圓の金も出来ないで、女房に因果を含め、又もや貧民窟の端つばへ宿替をしてやつたのだ。ホンの一晚ヌカ喜びをした丈だつたよ。

運の悪い者といふ奴ア、する事なす事悪いものだ。あ、あ、本當に世の中が厭になつて了つたワイ」

バルガン「ウッフ、其時の嬾の顔が見たかつたのう」

ガクシー「丸切り出来損ひの今戸焼のダルマみた様な顔をしてふくれた時にや、俺も聊か面目玉をつぶしたよ。エーエ、怪体の悪い、序にも一つ話してやる。これも人が引いてゐた時の話だ。日輪様が西の山の端に半身を隠された時分、一人のお客がやつて来て、……オイ俵屋、俺はジェールの都を見物に来た者だが、人の顔の見ねん様になる迄、十錢興るから乗せて呉れぬか、……と吐すので、此奴あボロい、三町か五町歩きや、ズッポリと日が暮れるだろ。其間に十錢の金もうけはボロいと、二つ返事でお客を乗せ。ゴロ／＼と引張出した所、二時間たつても三時間たつても下り

ようこぬかきず、とうと、夜明け頃迄俵を引かされた。それでもまだ、人の顔が見  
わるぢやないか。とお客は吐す、可怪しいと空を仰いで見ると、何の事だ、十四日  
の月夜だつた」

バルガン「ハ、可い馬鹿だな。さうで運の悪い奴のする事はそんなものだ。おまけに  
餘程の頓馬だからな、フ、フ、」

四九人の労働者も共に聲を揃へてゲラ／＼と笑つてゐる。そこへ守宮別、お花の兩  
人は何だか意茶つき乍ら阪路を上つて來た。

バルガン「オイ／＼、彼奴が日出島からやつて來たといふ、フンゾ喰ひの泥酔の守宮別  
といふ奴だ。そしてあの婆は石灰ガマの腫のようにコテ／＼と白粉をぬつて若う見  
せてゐやがるが、お寅といふ氣違婆に違ないよ。一つ腹いせに廻つてやろぢやない

か」

ガクシー「なぶつたつて仕方がないぢやないか。何と因果をつけて、懐の金でも、

おつほり出さすよにせなげや、忽ち明日の生計が立たないからの」

バルガン「それもさうだ、一つ相手になつてみよう」

と云ひ乍ら、守宮別の前にツカ／＼と進み寄り、

バルガン「エ、一寸物をお尋ね申しますが、日出島からお越になつてゐる、守宮別さん

いふ立派な宣傳使様は貴方ぢやないませぬか」

守宮「ウン、俺は守宮別だ。何ぞ用かな」

バルガン「ハイ、別に用といふてはムいませぬが」

守宮「何だい、用がなげりや、アタ邪魔臭い、尋ねるに及ばんぢやないか」



バルガン「オイ、ガクシー、之から汝の番だ。何だか尋ねる様な事があるように云つて  
たぢやないか。ドン／＼と、それ、物になる迄尋ねるのだぞ」

ガクシー「ヨシ来た。之からが俺の本舞臺だ。モシ／＼守宮別さん、此御婦人はお寅さん  
んでせうね。最前も聞いて居れば、神聖にして犯す可らざる此靈山へ、お寅さんと  
意茶つきもつて、お登りになつたが、左様な事をやつて貰ふと、聖地が汚れますよ  
エルサレムの市民がこんな事を聞かうものなら、お前さん、こんな事になるか知れ  
ませんぜ」

守宮「ハッハ、、、妬くない／＼。コレは、あやめのお花といつて、日出島切つて  
の別嬪だ。お寅なんか古めかしいワ。今日更めて結婚式をあけ、此靈山へ御禮参り  
旁、新婚旅行と洒落てるのだ。神さんだつて、聖場だつて、夫婦が参るのを咎

める理由はあるまい。自由の權だ。放つていてくれ」

ガクシー「放つてけといつても、放つてけんワイ」

守宮「そんなら何うするといふのだ」

ガクシー「汝の生命を頂戴する、覺悟せい」

守宮「ハ、、、おあいにくさま。一つより無い大事なく生命は、新婦人の花子  
嬢にサーッパリ與へて了うたのだ。モウ此上やらうといつたつて、やる物がないワ  
イ」

お花「ホ、、、もし／＼皆様、守宮別さんの命は皆妾が頂戴したのですよ」

ガクシー「エー、のろけやがるな。こゝを何と心得てゐやがる」

お花「こゝはバレンステナの中心地、エルサレムの市街を下に見る、キリスト再臨に名も

高き、橄欖山の中腹ですよ」

ガクシー「そらな〜んぬかしてけつかる。誰がそんな事を聞いてゐるかい。サ、汝の命と守宮別の命と、二つ乍ら一緒に貰はう、サ覺悟せい」

お花「お易い御用。何卒、生命をお取りやしたら、頼んでおきますが、守宮別さんと一緒に體を引括つて葬つて下さいや」

ガクシー「エー、此奴アたまらぬ、まだ惚けてゐやがる。著にも棒にもかゝらぬ代物だな」

お花「ホ、、、さうで、お前さん方の手に合ふような女ぢやムいませぬワイな。お前さんは其んな事いつてお金が欲しいのだから。お金が欲しければほしと、なぜ男らしうスッバリ言はんのだい」

ガクシー「斯うしてこゝに六人も待つてゐるのだから、少々目くされ金位貰つたつて仕方がないワ。とつと、百兩許しよこせ、そうすりや、無事に此關所を通過さしてやるワ。淫亂婆奴が……」

お花「ホ、、、妾は衆生濟度の爲、此世に現はれた眞宗の開山いんらん上人ですよ。肉食妻帯、勝手たるべしといふ宗門を開いたのだから、別に守宮別さんご手をつないで聖地を歩いたつて、靈山の法則に反きも致しますまい。アタ甲斐性のない。大きな荒男が六人も寄つて、百兩呉れなんて、よくも言へたものだな、せめて一万兩出してくれと何故言はんのだい」

ガクシー「一万兩でも十万兩でも、請求することア知つてるが、其面で大きな事いつたつて、持つて居相な事がない。それだから、汝の風体相應に百兩と云つたのだ」

お花 「へん、そんな貪<sup>びんぼん</sup>乏<sup>ぼく</sup>と思<sup>おも</sup>つて下さ<sup>くだ</sup>るのかい。コレ御<sup>ご</sup>覽<sup>らん</sup>、此<sup>この</sup>時<sup>とき</sup>金<sup>きん</sup>帳<sup>ちやう</sup>にチヤンと一万兩<sup>いちまんにやう</sup>付<sup>つ</sup>いてるでせう。併<sup>ひ</sup>し乍<sup>しば</sup>ら何<sup>なに</sup>程<sup>ほど</sup>請<sup>せう</sup>求<sup>きう</sup>したつて、やるやらぬは此<sup>この</sup>方<sup>ちやう</sup>の自<sup>じ</sup>由<sup>ゆう</sup>だ。そんなら仕<sup>しか</sup>方<sup>かた</sup>がないから、百<sup>ひゃく</sup>圓<sup>げん</sup>惠<sup>めぐ</sup>んで上<sup>あ</sup>げませう。今<sup>こん</sup>後<sup>ご</sup>は必<sup>かなら</sup>ず無<sup>む</sup>心<sup>しん</sup>を云<sup>い</sup>つちやなりませんよ」

と云<sup>い</sup>ひ乍<sup>しば</sup>ら、百<sup>ひゃく</sup>圓<sup>げん</sup>束<sup>たば</sup>を放<sup>は</sup>り出<sup>だ</sup>した。

ガクシー 「ヤア、これは、有<sup>あ</sup>難<sup>がた</sup>う、三<sup>さん</sup>拜<sup>はい</sup>九<sup>く</sup>拜<sup>はい</sup>、正<sup>ま</sup>に頂<sup>ちやう</sup>戴<sup>たい</sup>仕<sup>つか</sup>ります。さうか又<sup>また</sup>宜<sup>よろ</sup>しう御<sup>ご</sup>願<sup>ねん</sup>申<sup>まを</sup>します」

お花 「嫌<sup>いや</sup>だよ、もうこれつ切<sup>き</sup>りだから、覺<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>しなさい。サ、守<sup>まもり</sup>宮<sup>みや</sup>別<sup>わか</sup>さん、早<sup>はや</sup>くお山<sup>やま</sup>の頂<sup>たか</sup>上<sup>のうへ</sup>参<sup>まゐ</sup>りませう」

斯<sup>か</sup>かる所<sup>ところ</sup>へ十<sup>じゅう</sup>四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>人<sup>にん</sup>の武<sup>ぶ</sup>装<sup>さう</sup>した憲<sup>けん</sup>兵<sup>へい</sup>警<sup>けい</sup>官<sup>くわん</sup>現<sup>あら</sup>はれ來<sup>きた</sup>り、バルガン、ガクシーを始<sup>はじ</sup>め四<sup>し</sup>

人<sup>にん</sup>の勞<sup>らう</sup>働<sup>どう</sup>者<sup>しや</sup>を有<sup>あ</sup>無<sup>む</sup>をいはず、ふん縛<sup>ばく</sup>り、阪<sup>さか</sup>路<sup>ち</sup>を引<sup>ひ</sup>立<sup>た</sup>て、行<sup>い</sup>く。お花<sup>おはな</sup>は之<sup>これ</sup>を見<sup>み</sup>るより又<sup>また</sup>守<sup>まもり</sup>宮<sup>みや</sup>別<sup>わか</sup>が下<sup>くだ</sup>らぬ義<sup>ぎ</sup>俠<sup>けつ</sup>心<sup>しん</sup>を出<sup>だ</sup>してくれては面<sup>めん</sup>倒<sup>たう</sup>だ、守<sup>まもり</sup>宮<sup>みや</sup>別<sup>わか</sup>の手<sup>て</sup>を無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>無<sup>む</sup>体<sup>たい</sup>に引<sup>ひ</sup>張<sup>は</sup>り急<sup>きん</sup>阪<sup>はん</sup>を登<sup>のぼ</sup>り行<sup>い</sup>く。

(大正一四、八、二〇、舊七、一、於由良秋田別荘 松村眞澄録)

瑞 月

ねの國へ落ち行く身魂あはれみて  
直目の神は現坐にけり

鬼薔の花

一七八

瑞月

なす事も無くて月日を送りなば

人ご生れし甲斐や無からむ

むかしより佛いつきし祖々を

神ご祭りて厚く仕へん

第三篇 開花落花